

清末小説から 126

2017.7.1

- いくたびかの阿英目録17.....樽本照雄 1
漢訳リサール辞世詩 1 魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪.....荒井由美 9
「説部叢書」元版はタンポポ文様.....神田一三18
『瑞西独立警史』について 2 漢訳「スイス独立史」.....沢本香子29
清末小説から29、35

分載が続きます。それぞれが内容にみあった長さです。ご了解ください。次号の公開予定は

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録17

樽本照雄

少しの反応がある

張純、樽本の問題提起があったあとも、中国の学界は、長くこの『繡像小説』発行遅延問題に関心を示さなかった。定期発行説でこりかたまっていたのだ。関心がないというよりも問題提起そのものを無視した。それが存在することすら認識していなかった。問題を過小に評価したのだ。

1994年ようやく汪家熔が注目した。注目したといっても彼が論文を書いたわけではない。短文を書いて発表する機会を私に提供した。彼以外は、単に気づかなかったのか。あるいは、阿英の説明をまったく疑わなかったか。阿英によってすでに結論が出ている事柄だ、と考えていたのだろう。何も知らない外国人が勝手なことを書いている(中国人研究者が外国人の論文を批判するときの決まり文句)、くらいのことだ。

中国の研究者は、『繡像小説』発行遅延問題が抱えている課題の大きさに恐れを感じたか。李伯元「文明小史」ほかの贋作問題が面前に屹立している。だれも、それを直視できない。気がつかないふりをして、とにかく無視を続けている。無視をすれば事実は消滅する。ここでもか。

中国であらためて反応を示す論文がポツポツ出始めたのは、ずっと遅れて2000年以降のことだ。

発行遅延説を述べるものに郭浩帆の論文著作がある。以下のとおり。

郭浩帆「《繡像小説》創辦、刊行歴史追溯」

『清末小説』第23号2000.12.1

郭浩帆「張元濟、夏瑞芳与《繡像小説》」

『明清小説研究』2001年第1期(総第59期)2001発行月日不記

郭浩帆『中国近代四大小説雑誌研究』北京・当代中国出版社2003.6

一方で、王燕『晚清小説期刊史論』(長春・吉林人民出版社2002.11)がある。編者問題に言及する。しかし、李伯元本人と彼の友人たちが証言を残していないことに気を取られている。また、発行遅延説を認めながら、はなはだ軽微なものだ、と根拠のないことをいう(264頁)。その結果、王燕はあいもかわらず阿英の李伯元死去で停刊だとくりかえす。定期発行説を維持したわけだ。その箇所を引用しておく。「《繡像小説》1906年4月発行第72期、此後停刊」(244頁)。「李伯元1906年4月去世后不久、《繡像小説》即宣布停刊」(264頁)。

それ以後も、『繡像小説』発行遅延問題を正面から取り上げる論文はほとんど書かれなかった。

珍しい例としてずっと遅れて出てきた次をあげる。ここで「珍しい」というのは、本格的に発行遅延を追究していて「珍しい」という意味だ。それほど問題の存在に多くの研究者は注意を払わなかった。文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」(2006)だ。張純、樽本の問題提起が1985年だった。それから数えれば21年間の空白が生じたのはどういう理由からだろうか。中国の研究者は、少数を除いて阿英論文にとらわれて柔軟な研究精神を失っていた。そう私は思う。

私の検証作業に話をもどそう。

資料としての新聞 証明の方法

『東方雑誌』がある。月刊誌であり、刊年の

正確さでは日刊紙にはおよばない。だが該誌は版元がおなじ商務印書館だ。『繡像小説』の刊行広告が資料になる。これも参照した。

1980年代の日本で利用できる新聞は、前述『同文滬報』のほかは天津『大公報』影印版くらいだった。正確ではないかもしれない。『申報』影印版もすでにあっただか。順序が逆か。記憶があやふやだ。(ウェブで検索すると両者ともに1983年影印である。同時期の刊行だった)

研究情況が大きく変わりはじめた。それまで閲覧できなかった中国の新聞雑誌類だった。以前に小説雑誌の目録を作成するために、実物を求めて各地の図書館にかようほかなかった。といっても日本国内では限られていた。そういったところに、中国で影印本の出版発売が始まったのだ。

その流れのなかに上の天津『大公報』影印版があるのだろう。大部な影印『申報』の出版も同様だと思う。私が見た書店の宣伝広告によると『申報』は清末部分を別売するとあった。無理をすれば個人でなんとか購入できないこともない。発売を待った。ところが、実際に刊行されたのを見ると、別売はしないことに変更された。全冊一括で数百万円の売価がついている。これで遠のいた。この高額な印刷物は、勤務先の大学図書館に購入希望を出した。しかし、却下される。必要がない、という理由だ。しかたがない。それを所蔵する別の大学図書館に足を運ぶ。見ることであれば、それくらいのことはなんでもない。

『世界繁華報』までが縮小写真で入手できることになった。当然ながらこれも見る。保存されている数量は少ないし、まとまっていはいない。だが、李伯元が編集発行していた新聞だ。重要な資料だといえる。

思い出すのは1991年のことだ。上海で中国近代文学国際學術研討会が開催された。参加のついでに、希望して『世界繁華報』の実物を閲覧させてもらった。縮小写真などない昔のことだ。

実物しか保存されていない。移転前の上海図書館だった。もと競馬場の建物を利用しているという。古風な狭い閲覧室だったことをおぼえている。

出されてきた原紙数葉は、ほとんど崩壊寸前の状態だ。図書館側が閲覧の許可を出したがらなかったはずである。私は、手にすることをためらった。それが正直なところだ。まさか、これほどひどい状態だとは予想もしていなかった*47。

今あるのは縮小写真だ。拡大してじっくりと観察できる。うれしくないわけがない。『繡像小説』の刊行に関連する記事をいくつか見つけた。これも刊行時間を考える判断材料になる。

縮小写真『中外日報』も参考にした。こちらは上海図書館で閲覧していた。別に閲覧料金を取られた記憶がある。のちに縮小写真を部分的に購入した。また『遊戯報』も追加した。

利用できる材料が徐々に増加していく。それらを総合して1991年から『繡像小説』刊行一覧を作りはじめた。資料の蓄積に応じて改訂を続ける。ややまとまった刊行一覧表は、以下の論文に掲載した。今から考えれば中間報告だった。

樽本「『老残遊記』和『文明小史』的關係」(1993)だ。これは、『清末小説研究集稿』(済南・齊魯書社2006.8)に収録した。こちらを読んで興味をもった中国人研究者も出てきた。

『繡像小説』刊行一覧

刊行一覧表について、私がいちいち説明するのは理由がある。

『繡像小説』の刊行情況を追求するにあたり、資料として当時の新聞記事、広告を利用する。それを実行した研究者は、当時私を除いては誰もいなかったからだ。今でこそ、みな当たり前のように新聞を利用している。それを見ると、ああ昔のことだったなと思うだけ。

資料をとりまく周囲の環境それ自体が変化している。今の便利な情況に身を置いて、不自由

だった過去の研究の不足を非難するのはいかなものかと思う。阿英目録は、新聞掲載の小説は基本的に収録していない。新聞を利用できる状況にはなかった。それを責めてどうする。批判する人の想像力が欠落しているとしかしいようがない。先行論文を批判しながら研究が前進していく。それは理解している。だが、どこか違うだろうという違和感をいだく。

幾度か作り直した「『繡像小説』刊行一覧」の最新版は、『清末小説二談』(2017)に収録してある。ウェブ公開だから自由にご覧ください。

この刊行一覧をくりかえし見る。なんども眺め、どう検討しても『繡像小説』の刊行は遅延している。

刊行が遅れていただけの問題ではない。『繡像小説』に連載された有名な作品「文明小史」に影響が必然的に及ぶ。

「文明小史」の著者は李伯元ひとりだけなのか。この重要な疑問が引き出される。

李伯元の死後に、「文明小史」第59回が発表されている。死者は原稿を書かない。なぜそのことに気づかないのか。そこが理解できないと問題を過小評価してしまうだろう。「文明小史」は、李伯元の作品として論じられるのが普通だ。過去も現在も、研究者の全員がそうする。だが、『繡像小説』発行遅延説は、「文明小史」は李伯元だけの作品だという従来の考えを破壊してしまうのだ。そういう意味である。私は、過去に何度も指摘している。

『繡像小説』発行遅延に気づいた人とそうでない人

発表された論文につぎのものがある。

陳大康「中国近代小説史料 《繡像小説》中小説史料編年」(2010)*48は、発行遅延の事実を新聞広告によって記述する。文迎霞(2006)を継承している。

さらに、劉霞「關於《文明小史》的刊行時

間」(2012)*49が発表された。李伯元の肺病宣言(光緒三十二年二月十五日)を示し、彼の死去が同年三月十四日だ。劉霞の記述する年月日を考慮すれば、李伯元死去のあとに『繡像小説』第53、54期が刊行されたことになる。「文明小史」第57、58回も李伯元死去後の発表だ。劉霞は「文明小史」の発表を『繡像小説』発行遅延にそって詳細に追跡した。

そうかと思えば、いまだに阿英の定期発行説をかたくなに守り通している人もいる。発表時期が前後するが、次のようだ。

管林ら編撰「中国近代文学大事記(1840-1919)」(1996)*50がある。70頁にある原文を引用する。「(1905)4月7日、李伯元以瘵卒、年四十。由他主編的《繡像小説》也因此停刊、共出72期」いやはや。

劉徳隆が「老殘遊記(《繡像小説》本)目録」を公表している(2007)*51。498頁にある。彼は、私の主宰する年刊『清末小説』、季刊『清末小説から』の常連執筆だ。私の『繡像小説』発行遅延説も目にしているとばかり思っていた。劉徳隆が該文において、あるはずのない『繡像小説』の刊年を記入しているのには、正直いってがっかりした。

前出、劉晩目録(2008)だ。あいかわらず終刊を「至1906年4月(光緒三十二年三月)停刊」と誤る。樽目録第3版を参照しながら、そこにある記述の書き分けには気づかなかったようだ。

奇妙なのは、陳清茹『光緒二十九年(1903)小説研究』(2009)*52である。1903年に発表された小説に限定した著作だ。必然的に『繡像小説』が関係する。すると、もつづいた資料を誤読して説明していることが判明する。そのよつた文献とは、陳大康『中国近代小説編年』(2002)*53だ。

陳清茹が記述した奇妙な1例を示して説明しよう。

陳清茹は『繡像小説』第18期の刊行月日を

「十二月二十九」とする(216頁)。もともと該期に刊年の記載はない。しかも、半月刊の該誌は、月の初一日と十五日を刊行日としていた。だから、どこから二十九日という半端な数字が出てくるのかいぶかったことだ。見れば、『繡像小説』とは関係のない雑誌の刊年と取り違えているのだった。陳大康『編年』の記述を読み間違った。『編年』の書き方が紛らわしいということも原因のひとつだ*54。

阿英に呪縛された人

阿英説は、根強い。ため息が出てきそうなほどに強固だ。学界における権威だけのことはある。

祝均宙『図鑑百年文献 晚清民国年間期刊源流特点探求』(2012)*55である。32頁に「1906年4月停刊」と明記する。

また、習斌『晚清稀見小説経眼録』(2012)*56も同様。288頁に「隨着主編李伯元の去世而停刊」と説明する。阿英が「因伯元逝世休刊」と書いたのを明らかに引き写している。阿英がそう説明したのが1958年だ。『繡像小説』については、1980年代から発行遅延問題が活潑な討論課題のひとつになっていた。それらの研究とは没交渉に、半世紀をこえて阿英説は生き延びている。習斌という強力な支持者がいるのだ。すごいね。

同じく、習斌『晚清稀見小説鑑蔵録』(2013)*57がある。88頁に「李伯元去世后、《繡像小説》也隨之宣告終刊」と記してもいる。阿英説を信奉してまったく揺るがない。

すでに紹介した袁進主編『中国近代文学編年史：以文学広告為中心(1872-1914)』(2013)がある。

周羽が「《繡像小説》的貢獻」において、1903年5月創刊、1906年停刊と説明する(121頁)。1906年停刊はいい。だが、何月頃のことを指しているのかわからない。主編が李伯元であるのかわからないのか。一大論争があった。周羽は、

そのことに触れない。『繡像小説』発行遅延問題にはひとことも言及しないからその認識もないのだろう。「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係(後述)も無視だ。なんだろうな。発行遅延問題をいわないから、「文明小史」の著者が李伯元だけではない問題にも気づいていないようだ。122頁に『繡像小説』創刊号表紙の写真が掲げられている。初版牡丹文様ではなく、再版孔雀文様だ。初版と再版の区別をつけるつもりがないのか、あるいは編集者の勝手な判断によるものなのか。詳細はわからない。

結局のところ、周羽には、今まで行なわれてきた先行研究に学ぶ姿勢が弱いように見受けられる。ここも袁進主編が助言をする必要のあるところだと私は思う。どうだろうか。

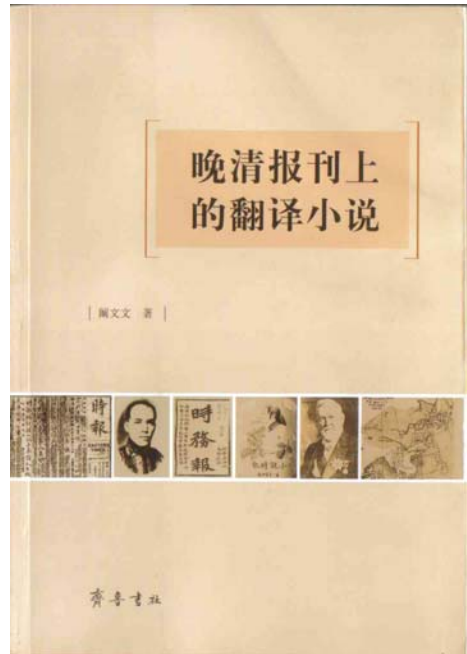
同様なことが同書の別のところにも出てくる。

周羽「《老残遊記》的藝術成就」だ。「老残遊記」は1903年9月21日『繡像小説』第9期に掲載され、その年旧曆十二月の第18期で終了、と書く(278頁)。第9期の刊年はよろしい。だが、該誌第18期「旧曆十二月」については誤り。そこに刊年は、記載されていないからだ。

該書において同じ調子で、狄霞晨は「泰西歴史演義」の連載終了を第38期「1904年11月21日」(106頁)と記す。ありもしない刊行月日を書いて平気である。同じく狄霞晨「李伯元文学創作与广告」を見る。創刊号を「1903年5月29日」と誤る。たぶん、王継権ら編『中国近代小説目録』(1998)*58あるいは劉永文編『晚清小説目録』(27頁)の誤記を引き写したのだろう。さらに、第56期「1905年7月」、第72期「1906年4月」とする。もとが刊年不記なのだから間違いである。

『中国近代文学編年史：以文学广告为中心(1872-1914)』になぜ誤りが集中しているのか。おかしなことだ。研究の蓄積がなされていない。

新しいのは關文文『晚清報刊上の翻譯小説』(2013。以下、文文と称す)*59だ。



關文文『晚清報刊上の翻譯小説』

書名のとおりに清末時期に刊行された新聞雑誌を主に対象とする。翻譯小説に的を絞った。そこに特色がある。原作者、原作を明示しない習慣があった当時のことだ。翻譯小説研究といってもその基礎を固めることが、そもそもむづかしい。

その附録におさめられた「晚清上海四大報紙翻譯小説内容提要」は、資料的価値が高い。

『時報』『申報』『新聞報』『神州日報』に掲載された翻譯作品を拾い上げる。そればかりか、それぞれの作品内容を要約して示した点がよろしい。実物を手にしてしかなしえない種類の基礎調査だ。私はこれを高く評価する。

雑誌掲載の作品を一覧表にしているのはよい。ただし、欠点もある。各作品についてその号数、また刊年を明記しない。基本事項をなぜ省略するのか。書かないことに特別な意味を持たせているのか。その理由が不明だ。新聞掲載作品については、旧曆で表示している。扱いが一定していない。疑問である。

厳密な態度をもって調べる人だと思う。だが

ら『繡像小説』に関する記述がどうなっているのか期待をしたのだった。

ところが、これが落胆しかもたらさない。意外なことだと思う。

すなわち、文文は、従来から追求されている『繡像小説』発行遅延問題についてまったく注意をはらわない。

該書13頁に雑誌4種、新聞4種の刊行一覧を掲げ、『繡像小説』については「1903.5～1906.4」と記す。「1906.4」とは従来からいわれる月2回が守られたばあいの終刊年月だ。その年月は、実物の雑誌に印刷されているわけではない。推定の刊年であって虚偽なのだ。いままで何度も確認している。

該書58頁でははっきりと「至光緒三十二年三月(1906年4月)停刊、共出版72期」と説明する。李伯元の死去が同年同月であることは書き込んではいない。だが、李伯元の死去が『繡像小説』の停刊を引き起こしたという阿英の説明を明らかに支持し継承している。

『繡像小説』発行遅延問題を追求したのは、文迎霞だ。その指導教授は、陳大康だという。同じ指導教授のもとで闕文文が、先行する文迎霞論文を見ていないようだ。そのあたりの事情が理解しにくい。同一教授が介在しながら、知識の伝達はなされないのか。そういぶかる。そこにこそ指導が必要ではないか。

以前本稿において、中国人研究者の叫びを紹介した。「編集者が立論しろとうるさい、資料についての論文では研究誌に掲載してくれない」である。すでに大学を退職した老大家だ。私の感想は、「作品について論じることが最優先される。書誌に関する基礎的な作業は、後まわしにされるようだ」というもの。『繡像小説』の刊年という基礎事項をめぐる上の記述は、まさに中国学界の現状を象徴しているのではないか。

『繡像小説』発行遅延問題を追求して研究の尖端に行く研究者がいる。一方には、その動き

には無関心で、2013年になっても従来通りに阿英の誤記を疑わずにくり返す人々がいる。やはり中国は広い、研究者は多い。あきれるくらいにそう実感する瞬間だ。

そうかといえればひとりで無知から既知を具現している研究者がいる。陳大康だとあらためていう。

陳大康の認識

陳大康『編年』(2002)の例をもうひとつ出しておく。155頁にそれがある。

『繡像小説』第71期と第72期に掲載された複数の作品を光緒三十二(1906)年三月末尾に記述している。『編年』では日にち順に配列するのが原則だ。日にちが不明な作品についてはその月の後ろにまとめて掲げる。月末に配置したのは、『繡像小説』第71、72期が1906年旧暦三月に刊行されたことを意味する。まさに阿英説そのままだ。2002年の陳大康はそう把握していたことがわかる。従来 of 定説を遵守していた。1980年代に発行遅延説が日中の研究者で話題になっていたことは知らなかったのだろう。あるいは、知っていてもそれを追跡する資料を持たなかった。

その後、陳大康の学生文迎霞が『繡像小説』発行遅延説を展開する論文を2006年に発表した。新聞広告を手がかりにしている。劉大紳が発行遅延の事実を知ったのはそのあたりかもしれない。または陳大康の指導で文迎霞が論文を執筆したのか。説明がないからわからない。陳大康は「近代小説編年史」を編集集中である、と2008年に報告している*60。時間経過で追うと、続いて陳大康「中国近代小説史料 《繡像小説》中小説史料編年」(2010)が公表された。新聞広告にもとづき発行遅延を取り込んだ。さらに、劉霞「關於《文明小史》的刊行時間」(2012)を経て陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文学出版社2014.1)につながった。

樽目録における記述の変遷

それを紹介する前に私が目録でどのように記述したかを紹介しておこう。中国の研究動態とは別に早くから発行遅延について調査を続けていた。それらの個別論文は今触れない(注で述べた)。目録を中心に説明する。

参考として上記『繡像小説』第72期についてだけを取りあげる。樽目録初版から私は以下のように記述している(記号表記を変更した)。

樽目初	1988	刊年不記1906?
樽目二	1997	丙午3?(1906.4?)
樽目三	2002	[丙午3.15(1906.4.8)]
樽目四	2011	丙午3.15(1906.4.8)と するは誤り
樽目五	2013	同上
樽目六	2014	同上 第72期実際の 刊年は推定丙午1906十二月
樽目X七	2015	同上
樽目X二八	2016	同上

樽目録初版はあるがままに「刊年不記」だ。記述がないから疑問符をつけた。第2版はそれまでの定説をかかげ、それにも疑問符をつけた。第3版は、別種のカッコ[]を使用した。これは実際には刊年不記であることを示す。ただし、それを理解する利用者は少ないかもしれない。第4版から記述を変更した。刊年については、一歩すすめて通説を「……とするは誤り」と明記した。それだけではまだ不十分だと考え直し、第6版からは推定刊年を追加した。『繡像小説』第13-72期全部にそれを施している。それができたのは、くり返すが調査を継続し長年にわたって情報を蓄積していたからだ。各種新聞の記事を広く集めて刊行の年月を推定した。発表された研究論文から関連部分を引用した。すべてに根拠がある。

細かく述べたのは、初版からなんども修正を加えてより正確な説明になるよう努力している

ことを知ってもらうためだ。参照できる研究文献が基本的になかったから独自に手探りで進めるよりほかなかった。

そのあとで2014年の陳大康『編年史』6冊を入手した。興味深い刊行物だ。

陳大康『編年史』6冊のこと

『編年史』序2頁には次のような説明がある。

たとえば、『繡像小説』は創刊したとき「月に2期の刊行」を言明していた。しかし、実際には半月に1期という定期出版は第5期よりなされてはいない。後に各期が結局のところいつ刊行されたのか、いくつかの論文で真摯に討論されたが、はやり一致した結論に達することができなかった。

如当年《繡像小説》創刊是宣称“月出兩期”，但實際上從第五期開始，就沒有按半月一期性的周期出版，後來各期究竟出於何時，就有些論文在認真討論，而且還莫衷一是。

陳大康は過去において『編年』(2002)では、阿英説を継承していた。『繡像小説』の「月に2期の刊行」が堅持されていたと考えていたのだ。8年後に『繡像小説』の年表を作成して刊年について修正した。そうして彼は『編年史』により12年前に自分が『編年』で述べたことを自ら完全に否定した。

陳大康は、『繡像小説』の刊行には問題があることを先行研究によって知ったようだ。そこまではよろしい。最初からすべてを知っている研究者は、ほとんどいない。

私が陳大康の説明に違和感をいだくのは、次の箇所だ。

「はやり一致した結論に達することができなかった[還莫衷一是]」

何について述べているのか説明がない。詳細が不明だ。私が推測して言えば、一致した結論に達しなかったのは、問題が提起されて討論がはじまったごく初期のことだ。雑誌刊行終了について私は光緒三十二(1906)年末を指摘し、張純は光緒三十三(1907)年七月以降だと述べた。私は発行遅延の根拠を新聞雑誌の出版広告に求め、張純は『繡像小説』に掲載された小説の内容をさぐった。その違いがある。その後、私は見た資料が増えるたびに何度も刊行一覧表を作り直し公表したが、張純は論文を発表しなかった。陳大康の上の説明は、『繡像小説』の刊年について論争があったことをいっているのだろう。ということは討論がなされたことを早くから知っていたことになる。その上で『編年』(2002)の記述だからその時点で『繡像小説』発行遅延説は無視したのだ。

私はそれまで継続していた研究成果を樽目録に反映させている。刊行の事実と迫った説明だと自分で思う。ただし、そういう具体的な研究情況は、陳大康には伝わっていないようだ。外国の研究成果を中国で受信することがむづかしいのだろうと感じたことだ。

しかし、私が年表(漢語:編年)を作成していた時、『繡像小説』出版延期の情況はとても重大だったが、1期を刊行するたびに必ず当時の上海の各新聞に出版広告を掲載していたことを発見した。だからそれはもともと基本的に問題というほどのことではなかった。

可是我在做編年時，發現尽管《繡像小説》出版延期的情況較嚴重，但它每出一期，都必定在當時上海各大報上刊登該期出版的廣告，這原來根本算不上是一個問題。

ここでいう「編年」は、以前の『編年』(2002)ではない。今回の『編年史』を指す。というこ

とは、2002年に『編年』を刊行したときは、当時の新聞は調査の対象にはしていなかった。ゆえに当時は阿英説を継承したとわかる。

新聞の出版広告を資料として利用する。それを当たり前のようになっている。先行例があるから陳大康にとっては、説明する必要もないくらいに当然のことだったようだ。

その結果、『繡像小説』の停刊について『編年史』 1160頁では次のように書く。

(『繡像小説』第72期) 出版時間は標示がないが、『新聞報』十二月十七日の広告によると本月(注:十二月)の出版にちがいない。

(上海《繡像小説》第七十二期) 該期未標出版時間，據《新聞報》十二月十七日廣告，當於本月出版。

その結論は、私の推測と一致する。利用している資料が同じならば結論が同一になるのは当然だ。

中国人研究者の論文記述方法にはひとつの定型がある。先行研究に誤りがあれば、研究者名を挙げて厳しく批判する。先行文献が正しい場合は、なにもいわず無視する。自分の創見だと考えれば、それを盛大に押し出すのが普通だ。

陳大康は『繡像小説』の発行遅延について中国における多くの先行文献が間違っていることを指摘しない。それを言えば自分が以前に刊行した『編年』を否定せざるをえなくなるからだ。外国における研究は目に入らないのだろう。だが、自国の研究者たち 張純、文迎霞、劉霞らの先行研究については言及する必要があったと考える。それをしたからといって『編年史』の価値が下がるとも思えないのだが。 罫

【注】

47) 樽本「言語に垣根はあっても、研究には国境はない 中国近代文学国際學術研討會參加雜記」

『清末小説』第14号1991.12.1、68-74頁。

- 48) 陳大康「中国近代小説史料 《繡像小説》中
小説史料編年」『文学遺産 網絡版』劉霞による
と2010.4.5 (未確認) 電字版で見ると
- 49) 劉霞「關於《文明小史》の刊行時間」『現代語
文』2012年第1期(総第454期)2012.1.5
- 50) 管林、鍾賢培、陳永標、謝飄方、汪松濤編撰
「中国近代文学大事記(1840-1919)」魏紹昌主編
『中国近代文学大系1840-1919』第12集第29卷 史
料索引集1 上海書店1996.3
- 51) 劉鶚著、劉德隆整理『劉鶚集』上下冊 長春・
吉林文史出版社2007.12 国家清史編纂委員會・文
献叢刊
- 52) 陳清茹『光緒二十九年(1903)小説研究』鄭
州・中州古籍出版社2009.9
- 53) 陳大康『中国近代小説編年』上海・華東師範大
学出版社2002.12
- 54) 次の文章で紹介した。樽本「小説目録に見る
『繡像小説』の刊行年月日」清末小説研究会ウエ
ブサイト 2011.5.19 電字版。要旨：『繡像小
説』の刊行年月日について中国の研究者が多く誤
記する。ありもしない刊行年月日を記述するのは
なぜなのか。それを言いはじめた阿英に呪縛され
ているらしい。
- 55) 祝均宙『図鑑百年文献 晚清民国年間期刊源
流特点探求』台湾・華藝學術出版社2012.12
- 56) 習斌『晚清稀見小説経眼録』上海世紀出版股份
有限公司遠東出版社2012.3
- 57) 習斌『晚清稀見小説鑑蔵録』上海世紀出版股份
有限公司遠東出版社2013.1
- 58) 王継権、夏生元編『中国近代小説目録』南昌・
百花洲文藝出版社1998.5 中国近代小説大系80。82
頁
- 59) 闕文文『晚清報刊上の翻譯小説』濟南・齊魯書
社2013.5
- 60) 陳大康「“近代小説編年史” 學術沙龍紀要」華
東師範大学網2008.3.24公開

次号の公開は2017年10月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

漢訳リサール辞世詩 1

魯迅と梁啓超をめぐる注釈の怪

荒井由美

魯迅の文章そのものが問題になっているわけ
ではない。議論の中心は、『魯迅全集』にほど
こされたひとつの注釈だ。フィリピン人リサール
の詩に関連している。梁啓超を巻き込んでい
るから注目される。長期間にわたって討論され
てきた。私が見るところ、魯迅はリサールの作
品とどのように関わったか、と問うことだ。

1 魯迅「雑憶」から

魯迅は「雑憶」(1925)において外国の詩人
を数名挙げた。清朝末期に一部中国の青年には
革命思潮が盛んであり、復讐と反抗を叫ぶ者は
共感を覚えた、と述べる。その文脈のなかで、
パイロン、ミツケヴェイチ、ペターフィおよ
びリサールの名前を出した。本稿で取りあげる
リサールに関係する部分の原文を引用する。

飛獵賓の文人而為西班牙政府所殺的釐沙
路^[7]， 他的祖父還是中国人，中国也曾
訊過他的絕命詩^{*1}。

フィリピンの知識人でスペイン政府に殺
されたりサール^[7] 彼の祖父は中国人で、
彼の辞世の詩は中国でもかつて翻訳された
ことがあった。

フィリピン人リサールの「辞世の詩 [絶命詩]」(本稿でいう「辞世詩」または「臨終の辞」)は、中国で翻訳されたことがある。それだけを述べた文章にすぎない。魯迅は表記して「絶命詩」というのみ。一般に知られている詩の題名も書いていないし、具体的な説明があるわけでもない。

魯迅はリサールの辞世詩を読んだから彼の名前を出したのだろう。だが、スペイン語で書かれた原詩ではないはずだ。英語に翻訳されたものとも違う*2。翻訳だとすれば日本語訳か、あるいは漢訳か。清末に読まれたというのだから漢訳を指すのかもしれない。ただし、その詩は誰が翻訳していつどこに発表したのか。魯迅はなにも書いてはいない。そこで文中に見える注釈7が問題になる(後述)。

リサールについて魯迅が触れた文章がもうひとつある。『魯迅全集』1981年版第8巻「随感録」である。

「フィリピンではリサールの小説を1冊だけ入手した [斐律賓只得了一本烈奮的小説]」79頁

この「随感録」は1918年4月から1919年4月の間に書かれたという。また、作者の手稿によったと注される。

魯迅は、リサールの漢訳に烈奮と釐沙路のふたつを当てた。

東京時代の魯迅がリサールの小説を山田美妙訳で読んだことについては、周作人の証言があることに注目されたい*3。しかし、リサールの辞世詩については、上のようにあいまいなままだ。

そこを調査するのが研究者の役割になる。

『魯迅全集』の注釈番号7を見てみよう。

2 梁啓超と「墓中呼声」 問題の発生

私の知る範囲内で『魯迅全集』1957年版*4の注釈が時期的には早い。後の説明の基礎となっている。注釈番号7は、1957年版も後の1981年

版でも同じ。ただし、内容が異なることは後に述べる。

まず1957年版から引用する。

[7] 釐沙路 (J. Rizal, 1861-1896), 或訳扶西・黎刹, 菲律賓愛國詩人。為當時占領菲律賓的外國統治者西班牙人所殺害, 他的絶命詩《墓中呼声》曾由梁啓超訳為中文。

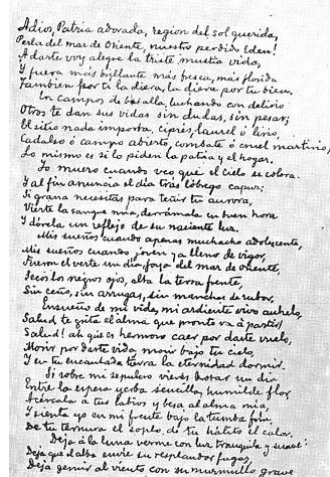
549頁

^{リサール}釐沙路 (J. Rizal, 1861-1896)、あるいは^{ホセ・リサール}扶西・黎刹と訳す。フィリピンの愛國詩人。当時フィリピンを占領していた外国の統治者スペイン人に殺害された。彼の辞世の詩「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」はかつて梁啓超により漢訳されたことがある。

リサールの辞世詩と梁啓超の翻訳があると簡潔に説明している。

リサールのスペイン語原詩は、後に別人により名づけられ「MI ÚTIMO PENSAMIENTO. [我が臨終の感想]」、あるいは「MI ÚLTIMO ADIÓS [我が最後の別れ]」と呼ばれて定着している。1連(節)5行、全14連70行によって構成された詩である。

原詩の題名が一定していないのは、リサールが処刑される前の作詩に題名そのものがなかったからだ。事実、ネット上で見ることのできるリサールの原稿らしきものには題名が書かれていない。記念館に展示してあるのは同時代人による複写原稿だろう。実物は紛失したという*5。



リサール辞世詩
ネットより引用

ところが、上記『魯迅全集』注釈によると辞世詩の題名は「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」だ。スペイン語原題の「我が臨終の感想」あるいは「我が最後の別れ」とは離れる。なぜその漢訳題名なのか。

もうひとつ、梁啓超が何語に基づいて漢訳したのか不明だ。さらに、いつどこに発表したのか。いくつもの疑問が普通に出てくる。

なにも解決されないまま結論としてリサールの辞世詩「墓中呼声」は、梁啓超によって漢訳されたという説明である。

上の説明はとてもあいまいだ。誤解を招く表現だといわざるをえない。

あらためて指摘しておきたい。1957年当時、リサールの辞世詩 漢訳者不明の中国でいう「墓中呼声」は、梁啓超の名前と並置されているにすぎない。梁啓超が漢訳したというその題名が「墓中呼声」ではないのだ。ご注意願いたい。リサール辞世詩(基づいた言語不明)を梁啓超が漢訳したことがある、というだけのこと。

ただし、字句の表面をたどっていくと「墓中呼声」という漢訳題名が梁啓超と結びつく。無理矢理だが梁啓超の漢訳が「墓中呼声」だと読めないことはない。だから、最初からそう誤解するのが普通になっている(後述)。

それにしても奇妙な注釈だと思う。

スペイン語でいう「我が臨終の感想」「我が最後の別れ」が漢訳されるとなぜ「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」になるのか。リサール辞世詩の内容からそうなるかと思いはする。それよりも、注釈者は「墓中呼声」という題名をどこから引いてきたのか。根拠があるはずだが、その説明はない(後述)。

さらには、梁啓超の漢訳があるというだけ。くり返すが、いつどこに発表したかなどの具体的な記述はない。

わざとあいまいにした注釈のように見える。その理由は、注釈者が伝聞だけに依拠し実物で確認していないからだろう。固有名詞を出せば

なにかの手がかりになるという判断があったはずだ。しかし、それは同時に解釈の混乱を招く恐れを生じさせた。

実のところ後には注釈をかさねて変な方向にねじ曲がった。梁啓超が漢訳してその題名が「墓中呼声」であることにしてしまうのだ。ここには根拠のない論理の飛躍がある。

後にほどこされたその注釈は、1957年版をもとにしてリサールについて少し詳しくなっている。異なるのは、梁啓超部分を大胆に書き換えたことだ。『魯迅全集』1981年版の注釈該当部分のみを引用する。

他的絶命詩《我的最後の告别》，曾由梁啓超訳成中文，題作《墓中呼声》。227頁

彼の辞世の詩「我が最後の別れ [我的最後の告别]」は、かつて梁啓超により漢訳され「墓中からの呼び声 [墓中呼声]」と題された。

この注釈で新しいところがある。リサールの詩が「我的最後の告别 [我が最後の別れ]」という一般に流布する題名であることを明らかにした点だ。

そこまでは、いい。問題は、もとの注釈に出てきていた「墓中呼声」について奇妙な記述変更を行なったことだ。すなわち、梁啓超がリサールの原詩を漢訳して「墓中呼声」と題した、と。根拠も示さずそう断言した。無責任な注釈だ。

1957年版では「墓中呼声」と梁啓超の名前を並置するだけだった。両者に直接の関係はない(傍点筆者)。それが1981年版になるとリサールの詩を梁啓超が漢訳して「墓中呼声」と題したと明記している。重要な箇所だから再度書いた。

そこまで記述しながら、梁啓超の「墓中呼声」は、いつどの媒体に掲載されたのかは言わない。不十分な注釈だ。これが新しい問題を引

き起こすことになる。

日本語訳をした北岡正子は、この原注をそのまま翻訳した。そこだけを引用する。

彼の辞世の詩「わが最後の別れ」は、梁啓超によって中国語に訳され、「墓中の呼び声」〔原文「墓中呼声」〕と題された。295頁

訳注において記述の変化を説明する必要があるとは考えなかったらしい。だから、魯迅がリサール辞世詩を読んだのであれば、どういう翻訳であったのかについても解説しない*6。

誤解のないようにお願いしたい。私は批判しているのではない。『魯迅全集』の注釈がそうになっているのを日本語に翻訳しただけだと言っている。リサールの辞世詩は梁啓超が漢訳して「墓中呼声」になった、と認識していることがわかる。それが普通の受け止め方だ。日本でも同じように解説する文章があるが、ここでは触れない。

この注釈に問題があることは21世紀になって明らかになった。1980年代当時、それが間違っていることに気づく研究者はひとりもいなかったのだ。これが事実である。

梁啓超の漢訳についてはもともとあやふやな注釈だと考える。しかし、驚いたことに今ではこれが定説になっている。

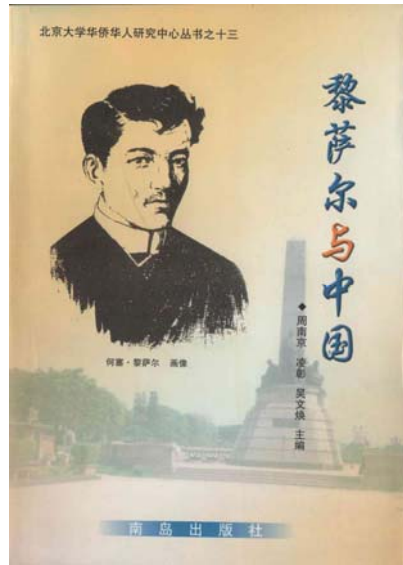
たとえば、『魯迅大辞典』(2009)*7の「厘沙路」から関係部分を翻訳して示す。

その辞世の詩「我が最後の別れ〔我的最後の告别〕」は、かつて梁啓超により漢訳され「墓中からの呼び声〔墓中呼声〕」と題された。778頁

『魯迅全集』1981年版の記述とほとんど同文だ。

この時点で世紀のかわった8年前の2001年にはすでにひとつの疑義が提出されていた。本当

に梁啓超の漢訳なのか、と。『魯迅大辞典』はそれを無視する。あるいは、単に存在を知らなかっただけかもしれない。



3 疑義の提出 『黎薩爾与中国』

梁啓超が漢訳したという従来の説明だった。これに対して疑問を表明したのは、周南京が主編『黎薩爾与中国』(2001)*8である。

「前言」において『魯迅全集』第1巻第549頁の注釈に言及する。頁数から1957年版だとわかる。関連箇所を翻訳して示す。注目すべきは後半部分だ。

また『魯迅全集』第1巻第549頁の紹介によると梁啓超はかつてリサールの辞世詩「墓中呼声」を翻訳したことがある。残念なことにいろいろと方法を講じて探したが、今にいたるまでまだ梁氏の漢訳文を探し当てていない。後日の補充を待つのみ。

重要なのは、専門家による長年の調査にもかかわらず梁啓超の訳詩は未発見だと明記している点だ。

冒頭にかかげた「前言」にそう書いたのには理由がある。該書に収録されたりサール辞世詩に関する複数の文章は、いずれも最初の漢訳者

が梁啓超であり「墓中呼声」と題したと記述しているからだ。それらを冒頭文であらかじめ否定したというわけ。

該書に収録した凌彰(298、314頁)、施穎洲(343、356、397頁)、呉文煥(436、437頁)、嚴萍と龔勳(439頁)たちの文章に出てくる。興味深いのは、梁啓超の漢訳だといって別人である陳天懐の訳詩を引く研究者がいることだ。邦帰(430、433、434-435頁)である。さすがに、これには編者による訂正がほどこされた。

それらを見れば、わざわざ否定しなければならないほどいわゆる梁啓超訳「墓中呼声」がしっかりと定説になっていることがわかる。

4 疑義の再提出 江樺論文

前出『魯迅全集』1981年版の注釈を再度問題にしたのは、江樺「黎薩《訣別詞》又一中訳本及訳者」(2008)*9である。

リサール辞世詩を梁啓超が漢訳して「墓中呼声」と題した、と1981年版の注釈を引用する。江樺は『黎薩爾与中国』の主編者のひとり呉文煥と面識があるらしい。呉文煥から聞いた話したと続ける。同じ主編者の周南京は梁啓超の訳詩を求めて梁の孫に問い合わせたという。それでも見つけることができなかった。『梁啓超全集』にもない。

江樺は、次のように発想した。

- 1 梁啓超はリサール「訣別詩」を漢訳したことはなかった。
- 2 梁啓超は漢訳したが『梁啓超全集』には収録されなかった。
- 3 リサール「訣別詩」は確かに漢訳されて「墓中呼声」となったが、翻訳したのは梁啓超ではなく別人である。

上の3条は可能性からいえば確かにありそうだ。妥当な推測だと考える。『黎薩爾与中国』の主編者周南京が探して見つからない。そうな

らば、残るのは3番目の別人が漢訳して「墓中呼声」としただけになる。

江樺が新しく見つけたのは真吾重訳「墓中呼声」(『語絲』第5巻第4期 1929.4.1影印本。32-38頁)だ。



文末に真吾(本名崔功河*10、1902-37)による説明がある。最後部分に「原文はスペイン語である。今、英語より重訳した。聞くところによれば梁啓超がかつて文言で翻訳したことがあるというが、残念ながら私は見たことがない」(38頁)と述べる。

真吾によれば、梁啓超の漢訳があるという伝聞は以前から存在していたらしい。しかし、それ以上の詳しい説明はない。伝聞だからだ。真吾自身も見たことがない。

前出『魯迅全集』1957年版の注釈は、真吾の説明を無断借用したものとわかる。注釈には真吾の文章から引用したことを明示しなかった。だから無断借用という。しかも、真吾重訳「墓中呼声」から真吾の名前をはずして題名だけを採用した。無神経な注釈のつけ方だとしかいいようがない。

江樺の新しい発見は、リサール作、崔真吾重訳「墓中呼声」の存在を明らかにした点だ。その結果、『魯迅全集』のリサール辞世詩についての注釈は誤りであることが確定した。

5 李海の指摘

李海の日本語論文「梁啓超は『墓中呼声』を訳したか」(2009)*11は、論の進め方が江樺論文とよく似ている。だが、江樺の文章について李海は言及しない。それを参考にしたかどうかは知らない。参考にしていなければ偶然の一致だろう。

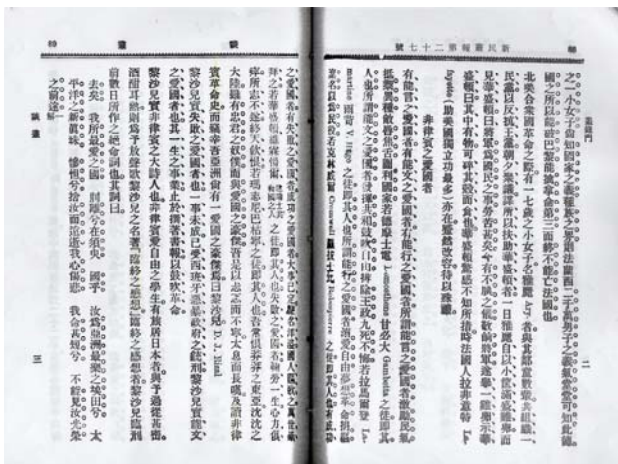
『魯迅全集』1981年版の注釈を紹介し「この注釈では、はっきりとリサールの絶命詞は梁啓超によって訳されたと書かれている」(59頁)と述べる。その点に李海は疑問を抱いた。主として前出『黎薩爾与中国』を利用して先行研究を検討した。フィリピンにおいても「梁啓超は初めてリサールの絶命詞を漢訳した者として定着していた」(62頁)と書く。

李海の立論が江樺論文と似ていると私がいうのは、ふたつの可能性を挙げた点を指している。以下のとおり。

梁が訳したが、その詩は未発見である。

梁がその詩を訳しておらず、他の人が訳していた。64頁

江樺の発想とほぼ同じだとわかる。



李海が取りだすのは馬君武が訳した「リサールの絶命詞」だ。「1903年3月17[12]日『新民叢報』第27号に掲載された」(64頁。65頁では

3月12日と正しい)と指摘する。これが新しい。

ただし、馬君武の訳詩を魯迅が読んでいたかどうかについて李海は述べない。漢訳があるというだけ。「読者が馬君武の訳を梁啓超の訳だと誤認したのではないかと筆者は考えている」(同前)というのだが、意味不明。『魯迅全集』の注釈を指しているのであれば、注釈者が「読者」になるのだが、そうだろうか。一般的な読者だという意味か。梁啓超がリサール辞世詩を訳したという風説があることを言っているようにも読める。「読者」の内容が不明だ。

また、リサール原詩は14連あるが、馬君武の訳詩「臨終之感想」は10連しかない。10連をさして「全詩」(65頁)と呼び「その全詩を挙げておこう」(同前)と引用する。14連と10連では数が合わない。少なくとも4連を漢訳していない事実を明記すべきだった。もしかして、この時点ではリサール原詩が14連であることを知らなかったのだろうか。まさかと思う。

李海は、つぎに真吾「墓中呼声」を提出する。前述したとおり真吾訳詩については江樺の言及が先行する。くり返して申し訳ないが、李海は江樺論文については触れていない。

胡從経が作新社版いわゆる『学生歌』にリサール辞世詩「菲律賓愛国者黎沙兒絶命詞」が掲載されていると指摘した。『学生歌』の刊行は1904年だから、馬君武の訳詩の方が1年早い。また、李海のいうように『学生歌』所収の漢訳は、『新民叢報』に掲載された「署名君武の訳詩と同一物である」(71頁)。その『新民叢報』との関係で「馬君武が訳したりサールの絶命詞が梁啓超の作と誤認された可能性が十分にあると思う」(71頁)となる。

李海論文の新しいところは、馬君武の訳詩を見つけたことだと重ねていう(李海論文をたぶん読んでいない楊麗華は同じことを2011年に書いている)。

後に李海が名古屋大学博士論文(2014)*12として提出した文章には、今取りあげている部分

に注釈の追加がある。

しかし筆者の研究では、これまで発見された最も早い段階でのリサールの絶命詞の訳詩は、1903年梁啓超が主筆を務めていた『新民叢報』に掲載された馬君武のものである³⁵⁴ 140頁

354 本文の脱稿後、筆者は『飛律賓志士独立伝』(1902年10月10日発行)という呉超が翻訳した書籍の中に、リサールの絶命詩を発見した。ただし、この訳作は訳者の日本語能力が不十分であったため、意味すら満足に伝わらなかった。140頁。

「訳者の日本語能力が不十分であったため、意味すら満足に伝わらなかった」と述べる。すなわち李海は自注において、呉超の漢訳は意味が伝わらないほどに悪いという自分の意見を表明した。呉超の漢訳に対しての評価は低い。ただし、そう断言したのみ。どこがどのように「意味すら満足に伝わらなかった」のか具体的な内容については説明しない。李海は、自分で馬君武の訳詩を先に発見したから、それを過大視してしまったようだ。ここは呉超訳と馬君武訳を比較対照し検討する必要がある。

もとにもどると、李海が発掘した馬君武の漢訳は、なににもとづいたものか。英語からの重訳か、それとも別の翻訳だろうか。これについても言及がない。

奇妙なことだと思う。馬君武の訳詩は前述のとおり1903年に公表されている。呉超訳はそれよりも前だ。漢訳リサール辞世詩の最初の漢訳者は呉超であるとしなければならない。博士論文執筆時に見つけて追加の注をほどこした。だから単行本にしたときにはその箇所当然書きかえがあるだろうと私は考えた。発表順からいえば、呉超訳が先行し馬君武訳が後になる、と。そう説明してこそ立論の合理性が保たれる。

李海『日本亡命期の梁啓超』(2014)*¹³である。

確認する。呉超漢訳は、1902年10月10日の刊行だ。一方の馬君武漢訳の公表は、1903年3月12日だ。明らかに呉超のほうが馬君武よりも早い。だが、李海はその事実を無視する。李海著『日本亡命期の梁啓超』306頁でも博士論文と同文であるのには少し落胆した。訂正すべき箇所が訂正されていない。

調査不足である。基本的なことだ。『飛律賓志士独立伝』は呉超による漢訳作品という点に注意をはらうべきだった。呉超には依った底本が存在する。だからこそ呉超訳なのだ。漢訳の底本を探さなければならない。その当たり前すぎる発想が李海にはなかったらしい。ここに気づいていれば、立論は新しい展開を見せただろう。李海は、問題を解く鍵、すなわち彼のいう『飛律賓志士独立伝』を手中にしていたのだ。しかし、それが鍵であるという認識がなかった。惜しいというほかない。

6 陳漱渝論文

公表の時間順に並べれば次は陳漱渝論文になる。あらかじめ断っておく。すべての関連論文を本稿で取りあげる考えはない。

陳漱渝「心靈の感応」(2011)*¹⁴を読んで不思議に思う。魯迅が日本に留学していたときリサールの「絶命詩」に触れたが、それは梁啓超が訳した「墓中呼声」であった。陳漱渝は当たり前のようにそう説明する。間違いだと指摘する複数の論文がすでに公になっているにもかかわらずだ。

そればかりか、梁啓超「墓中呼声」だといって以下の詩句を示す。

方見天際破曉，我即与世長辭，朦朧夜色
已尽，光明白日将至；若是天色黯淡，有我
鮮血在此；任憑祖國需要，傾注又何足惜；
洒落一片殷紅，初昇曙光染赤。

陳漱渝は、この部分訳がいつどこに掲載され

たのかを書いていない。追跡検証をすることが不可能である。根拠の不確かな文章だ。

ネットで検索すれば、陳漱渝よりも前に同じ詩句を掲げているものがある。付志剛「伝奇黎刹」(『光明日報』2011.8.16付 電字版)だ。これも根拠を示していない。発表時間を見れば、付志剛が先で陳漱渝が後だ。陳漱渝が付志剛論文を見て引用したのだろうか。説明がないからわからない。

それよりもはるか以前の1978年に陳堯光が「方見天際破曉」以下の詩句を示していた*15。フィリピンのリサールが処刑される前に書いた辞世詩の一節というだけ。梁啓超の名前は出していない。作者、公表媒体、時間など肝心な情報が皆無である。信用することはできない。

それ以来、梁啓超の名前を出したり出さなかったりはするが、同じ詩句がくりかえし引用されているようだ。これほど長期間にわたって見え隠れしている。出処不明でかつ根拠がない。しかしそれが梁啓超による漢訳である、と陳漱渝は堂々と自信をもって主張している。不可解なことだ。

7 孟昭毅と鄭寧人がまとめる

孟昭毅、鄭寧人「菲律賓作家黎薩爾与20世紀中国文壇」(2014)*16は、リサール辞世詩が中国に伝えられた状況もふくめて説明している。関連部分だけを以下に引く。

1896年、リサールは処刑される前に辞世詩を書いた。それを妹に渡し、アイルランド系(一説にスコットランド系)の女性ジョセフィン・ブラッケン*17が香港に持ち込んだ。1897年、リサールの親友マリアノ・ボンセがそれを香港で発表した、と。

孟鄭論文では、以下にリサール辞世詩を漢訳した人々を順に紹介する。本稿に関係する人だけを取りあげる。

1 1904年、『教育必用学生歌』が「菲律賓愛国者黎沙兒絶命詞」を収録する。

いわゆる『学生歌』に漢訳リサール辞世詩を収録するとき、題名をあたらしく「菲律賓愛国者黎沙兒絶命詞」と付け、さらに「訳者未署名」とした。

これは、李海論文に出てきた。私が説明すれば、馬君武の文章名が「菲律賓之愛国者」だ。『学生歌』は、馬の文中に登場する「黎沙兒」と「絶命詞」を結合して題名を付けたとわかる。馬君武の同じ文章に示されている「臨終之感想」は『学生歌』では採用しなかった。その理由は不明。馬君武漢訳が先に公表され、それが『学生歌』に収録されたという経緯だ。李海が日本でそれを指摘した。だが、孟鄭は李海論文を読んでいないらしい。ゆえに馬君武への言及はない。李海のは日本語論文だから無理もないか。

孟鄭は、この『学生歌』を魯迅は知っていたはずだと書いている。その可能性はないことはない。だが、確かな証拠は存在しない。

2 梁啓超が2番目の訳者だという。その根拠は、ここでも『魯迅全集』の注釈だ。依拠するのは凌彰論文である。もとになった凌彰「魯迅評介黎薩爾的重要意義」(1992)*18から直接引用する。

辞世詩については、『魯迅全集』第1巻549頁の注釈紹介によれば梁啓超が漢訳して「墓中呼声」という。「釐沙路」は日本語の「リサル」の音訳だから、ここから推測すると梁啓超は日本語から辞世詩を転訳した。125頁

この「リサル」云々は凌彰の推測であって全集の注釈にあるわけではない。

すでに否定されている梁啓超漢訳説だ。しかし何度も蒸し返される。その後の学界は、梁啓超漢訳「墓中呼声」についてひとつの混乱状況を呈しているといっている。真吾重訳「墓中呼声」はあるにしても、梁啓超の漢訳は探し当て

ることができないのだ。だが、いまだに『魯迅全集』と『飲氷室文集』に見えるなどという根拠のない記述もでてくる。具体的な頁数を明示していないことが根拠不十分であることを示している。

以上に紹介した論文群は、重要な鍵語を見失っている。日本である。 ☒

【注】

- 1) 『魯迅全集』北京・人民文学出版社1981北京第1版 / 1982北京第1次印刷(1981年版と称する)第1巻 221頁
- 2) 魯迅の英語については次を参照。孟慶澍「彼此在場的読と写:1907年の周氏兄弟」『中国現代文学研究叢刊』2017年第3期(総第212期) 2017.3.15
- 3) 周啓明(作人)『魯迅的青年時代』北京・中国青年出版社1957.3。「一二 再是東京」「他又得到日本山田美妙所訳的,菲律賓革命家列札爾(後被西班牙軍所殺害)的一本小説,原名似是“社会的瘡”,也很珍重,想找英訳来对照翻譯,可是終于未能成功」42頁。中島長文編『魯迅目録書目 日本書之部』私家版 1986.3.25の59頁に「フィリピン リサアル著、山田美妙訳『血の涙』内外出版協会1903.10」と掲載される。該書は国立国会図書館デジタルコレクションで読むことができる。原題「ノリ、メ、タンペレ Noli Me Tangere」と説明がある。ラテン語で「ノーリー・ミ・タンジェレ」は「私に触れるな」という意味。リサールの小説が何か、あるいは周作人の証言があることについて、1981年版の原注、およびその学研版『魯迅全集』10の訳注(伊藤虎丸。127頁)でも言及はない。
- 4) 『魯迅全集』第1巻 北京・人民文学出版社1957.5。1957年版と称する。
- 5) Miguel A. Bernad, “The Nature of Rizal's Farewell Poem”, *Budhi; A Journal of Ideas and Culture*, 5(36.1), 2002. p. 195
- 6) 『魯迅全集』1 墳・熱風 学習研究社1984.11.22 / 1986.12.10第二刷。原注295頁
- 7) 《魯迅大辞典》編委会編『魯迅大辞典』北京・人民文学出版社2009.12
- 8) 周南京、凌彰、呉文煥主編『黎薩爾与中国』香港・南島出版社2001.5
- 9) 江樺「黎薩《訣別詞》又一中訳本及訳者 写在黎薩甥孫女的《爺爺扶西・修訂本》發行前夕」『世界日報』広場欄 2008.12.8 電字版。江樺は中国系フィリピン人。本名呉建省
- 10) 魯迅、柔石、王方仁、許広平らと朝花社を結成した。丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版1985.9.30。190頁には崔新吾(采石)で記載される。丸山昇執筆
- 11) 李海「梁啓超は『墓中呼声』を訳したか リサールの絶命詞をめぐって」『名古屋大学中国語学文学論集』第21輯2009.12。「ママ」としたように李海は絶命詩と絶命詞を混在させている。引用文は原文のまま。
- 12) 李海『梁啓超研究 その日本滞在期を中心に』名古屋大学博士論文 2014.3 電字版
- 13) 李海『日本亡命期の梁啓超』桜美林大学北東アジア総合研究所2014.7.2
- 14) 陳漱渝「心靈的感応 魯迅与菲律賓作家黎刹」『天津日報』2011.8.31(29?) 電字版
- 15) 陳堯光「菲律賓愛国者の声音 読何塞・黎薩爾的名著《不許犯我》」『人民日報』1978.2.10 電字版。夏曉虹氏よりご教示いただいた。感謝。
- 16) 孟昭毅、鄭寧人「菲律賓作家黎薩爾与20世紀中国文壇」『華文文学』2014年第1期 2014.2.20 電字版
- 17) Josephine Bracken, 1876-1902。処刑の直前に結婚した。凌彰「東海の壯歌 論黎薩爾的絶命詩」(『黎薩爾与中国』所収。316頁)では、リサールの辞世詩を持ち出したのはブラッケンだとする。
- 18) 凌彰「魯迅評介黎薩爾的重要意義」『魯迅研究年刊(1991-1992)』北京・中国和平出版社1992.10

「説部叢書」元版はタンポポ文様

神田 一三

商務印書館(以下、商務版と称す)「説部叢書」の大まかな変遷を表現すれば、元版から初集への変化である。その基本的な変化を可視化するためには、表紙はタンポポ文様(元版)からリボン文様(初集)になったと言ったほうがわかりやすい。



金銀島 タンポポ文様 リボン文様

説部叢書と「説部叢書」

普通名詞の説部叢書は、説部 = 小説を集めてシリーズにしたという意味にすぎない。一般に主として創作である。清末時期では、改良小説社、群学社、小説進歩社、沢新書社などが説部叢書を刊行していた。

ただし、商務印書館のばあいは少し特異だ。ある時期から外国小説の翻訳に限定したシリー

ズ名として使用しはじめた。また、大量であって収録数が多いことも特徴のひとつだ。文学史で商務印書館の説部叢書と書かれるばあい、カッコがついていなくても翻訳小説叢書を指すことが多い。

本稿でいう商務印書館の説部叢書は、カッコをつけない、つけるの2種類で区別する。

カッコなしのばあいは、単に小説を集めたものを指しているだけ。翻訳とはかぎらない。カッコ付き「説部叢書」は、海外小説の翻訳叢書に特化している。そういう分け方だ。

わざわざ説明するのは、今までその2種類を分けて認識した論文は少ないからだ。

本稿において、商務版「説部叢書」がどのように成立したかを考える。すなわち、一般名詞の説部叢書から固有名詞の「説部叢書」にどのように変化移行していったか、である。また、奇妙な集編番号があることを再び取りあげる。それについて新しいバージョンを追加する。

次のように言い直しても同じだ。「説部叢書」は海外小説の翻訳シリーズとして最初からあったわけではない。はじめは個々の作品として公表刊行していたものを「説部叢書」という名称のもとに再編集してはじまった。

そう考えていいのだろうか。あらためてその状況を探る。

基本部分を説明する。

翻訳シリーズものの商務版「説部叢書」は、全十集、各集十編の合計100編である。これを元版という。元版は表紙の違いによってふたつに分かれる。おいおい説明する。付建舟は、それ全体を指して「十集系列」とよんでいる。

1908年に作品構成が変更された。2作品について、つまり『佳人奇遇』が『天際落花』(戊申年(1908)五月初版)に、『経国美談』が『劇場奇案』(光緒三十四年(1908)六月初版)に入れ替えられた。改組と称する。それを含めると収録作品は、全102編となる。

のちに元版を「初集」と改名して統合した。

編数は第1編から第100編まで。元版の全102編が初集に移行して全100編に減少するのは、『佳人奇遇』『経国美談』を最初から収録していないからだ。

問題はこの元版に集中して発生している。研究が十分なされていない。あるいは、資料が不足していると言い直してもいい。元版の延長上にある試行本については別に紹介した(「商務版「説部叢書」試行本」『清末小説から』第125号)。また、後の初集、2集(「第」はつかない)、第3集、第4集(元版と区別するためにアラビア数字を使用する)も本稿では扱わない。

普通名詞の説部叢書

『繡像小説』第30期(刊年なし。推定光緒三十一年(1905)二月刊行)に掲載された商務印書館の自社出版広告(図1)に注目する。



1 『繡像小説』第30期

広告の題は「上海商務印書館新訳説部叢書出版廣告」だ。それぞれの価格を明示した既刊の書籍が18種、定価のない「続出書」が4種あがっている。定価を示さない書籍は出版予告だ。

以下に書名だけを書き抜き、それぞれに[阿英]と注釈を加える。

[阿英]は、阿英「晚清小説目」*1を指す。阿英目録をここで使用するの、阿英が実物を手にしてこの目録を作成したからだ。実物で確認していることが重要である。ただし、「説部叢書」はその表示がない。採取対象項目にはなっていないかららしい。だいが後に私は気づいた。ゆえに、阿英が記述した作品がはたして「説部叢書」かどうかは判別できない。ここが理解をむつかしくしている原因でもある。刊年を知るためだけの参考資料にしかならない。

- 英国詩人吟邊燕語 [阿英124] 光緒三十年(1904)
- 佳人奇遇 [阿英127] 光緒丁未(1907)^ア
- 経国美談前後編 [阿英156] 光緒二十八年(1902)
- 夢遊二十一世紀 [阿英153] 光緒二十九年(1903)
- 補訳華生包探案 [阿英151] 光緒二十九年(1903)
- 案中案 [阿英135] 光緒三十年(1904)
- 環遊月球 [阿英164] 光緒三十年(1904)
- 黄金血 [阿英148] 光緒三十年(1904)
- 空中飛艇上 阿英目録に商務版は未収録。[付日61]の商務版は光緒二十九年八月初版/光緒三十一年九月再版。
ちなみに[阿英127] 光緒二十九年(1903)は明権社の刊行。
- 空中飛艇中 同上
- 金銀島 [阿英126] 光緒三十年(1904)
- 美洲童子万里尋親記 [阿英132] 光緒三十年(1904)
- 評註繪圖聊齋志異 古典小説
- 繡像三国志 古典小説
- 繡像列国志 古典小説
- 日俄戰紀 戦記
- 東方雜誌 雑誌
- 続出書
- 回頭看 [阿英121] 光緒三十一年(1905)
- 珊瑚美人 [阿英134] 光緒三十一年(1905)
- 降妖記 [阿英129] 光緒三十一年(1905)
- 賣国奴 [阿英160] 光緒三十一年(1905)

この広告に掲げられた説部叢書は、一般的な

小説という意味で使用されている。なぜなら、古典小説、雑誌を含めているからだ。翻訳に限定していないところにご注目いただきたい。また、上記のように『空中飛艇』は「説部叢書」には未収録だ。これも普通名詞の説部叢書だという理由になる。

阿英目録は、前述のとおり「説部叢書」表記の有無について記述していない。ゆえに、刊行されたことがわかるだけ。問題は解決しないのだ。私がここでいう「問題」とは、翻訳シリーズ「説部叢書」に収録される以前に単行本として刊行されていたかどうかという問題である。

「先元版」など 検証の手段

本稿でも以前と同じく「先元版」という用語を使用する。

元版とは、「説部叢書」というシリーズ名称のもとに刊行された最初の書籍郡だ。縦書きで「説部叢書 第 集 / 第 編」と印字する。最初は毛筆(元版1型a)で表記され後には活字(元版1型b)に変更される。

この元版に収録される以前の刊行物を「先元版」といっている。小説雑誌に連載された作品を含む。それ以外にもかなりの数があるという印象を抱いていた。阿英目録にある「説部叢書」を表示しない作品は、翻訳シリーズに含まれない単行本だと判断していたからだ。

たとえば、ヨーカイ・モール著、周作人訳『匈奴奇士録』(1908)がある。はじめは単行本で刊行され、のちに「説部叢書」2集第51編(1915)に収録された。そういう多くの例を見ていたから「先元版」も同じだと考えて不思議には思わなかったのだ。

以前は利用できる工具書といえば阿英目録があるくらいだった。中国で編集刊行された後の目録も、ほとんどが阿英目録を引用してしまっているように見えた。だが、現在は研究環境が一変している。ウェブの発達によって図書館の書目も公開されている。便利になったものだ。

それよりも、書影を掲げるウェブサイトがだいぶ以前から出現しているのは注目に値する。居ながらにして機器を通して目にできる書籍が飛躍的に増大している。

ネット古書店のいくつかは、書誌に添えて書影を掲げる。書店関係者が添えた書誌の間違いは無視すればいい。役に立つのは画像の方だ。表紙と奥付は小説目録に欠くことができない。それを見ることができるばあいがある。図書館などの蔵書目録には入力間違いが生じる可能性から逃れることはむづかしい。だが、写真であればかなり信頼できる。

また、中国には影印本を制作販売する専門のウェブサイトもある。注意深く利用すれば、実物とほぼ同じものを目にできる。

ウェブを利用してあらためて調査することにした。すると意外なことが判明したのだ。「説部叢書」に収録される前に単行本として商務印書館から出版された先元版は、『経国美談』くらいしかない。もうひとつの『佳人奇遇』もそうらしい。ただし私は実物で確認していない。そのほかの単行本ではない先元版は、主として雑誌掲載の作品になる。

広告(写真を引用した)が掲載された『繡像小説』第30期の刊年は推定1905年だ。その時点で、すでに「説部叢書」は刊行が始まっている。この広告にはそれが反映されていない。集編番号も明示しておらず「説部叢書」ではない作品もある。古典小説と雑誌を混在させていると再びいう。

翻訳シリーズの「説部叢書」

次に『繡像小説』第41期(刊年なし。推定光緒三十一年(1905)八月刊行)に掲載された「本館出版説部叢書」という広告(図2)を見る。

その第一集と第二集の書名を引用する。

それぞれの作品に先元版、すなわち初出があれば「」印のうしろに注記する。×印は先行発表なし、という意味。元版の表紙は、前述の

書叢部説版出館本									
第一集									
編第十	編第九	編第八	編第七	編第六	編第五	編第四	編第三	編第二	編第一
黄金鼠	董美子	吟邊燕語	環遊月球	案中案	小仙源	補譯華生包探案	夢遊二十世紀	經國美談前後編	佳人奇遇
每本洋二角	每本洋三角	每本洋三角五分	每本洋三角	每本洋二角	每本洋	每本洋二角	每本洋二角	每本洋五角	每本洋七角
第二集									
編第十	編第九	編第八	編第七	編第六	編第五	編第四	編第三	編第二	編第一
鬼山狼俠傳	雙指印	子天孝	春嬌奇冤	撒謊記	埃及金塔剖尸記三番	寶蘭奴	環遊美人	降妖記	足本迦商小傳二册
每本洋一元	每本洋二角五分	每部洋九角	每本洋八角	每部洋	每部洋一元	每本洋	每本洋三角	每部洋一元	每本洋三角
第三集									
編第十	編第九	編第八	編第七	編第六	編第五	編第四	編第三	編第二	編第一
鬼山狼俠傳	雙指印	子天孝	春嬌奇冤	撒謊記	埃及金塔剖尸記三番	寶蘭奴	環遊美人	降妖記	足本迦商小傳二册
每本洋一元	每本洋二角五分	每部洋九角	每本洋八角	每部洋	每部洋一元	每本洋	每本洋三角	每部洋一元	每本洋三角

2 『繡像小説』第41期

ように「説部叢書」の集編番号と書名、商務印書館名を縦書きにしている。別表紙とは、元版表紙を扉にしてもう1枚の表紙を貼り付けている。いくつかの絵図が目立つが文字だけのものもある。表紙をタンポボ文様(元版2型)に統一したのは1905年からだ。

少しの実物と付建舟著作、ネット古書店などで確認したものを次行に記述する(別頁に書影をまとめて掲載した)。これで刊行情況がわかるだろう。

第一集

第一編 佳人奇遇 先行単行本は『佳人之奇遇』1901、未確認
 奥付なし 元版 孔夫子旧書網(図3、3b) / タンポボ文様 複写架蔵 孔夫子旧書網(図4)

注:のちに入れ替えて『天際落花』戊申(1908)五月、未確認

第二編 經國美談前後編 先行単行本あり 刊年不明 孔夫子旧書網(図5、6)

奥付なし 元版 別表紙 複写架蔵(図7、8)

注:のちに入れ替えて『劇場奇案』光緒三十四年六月[付二25]

第三編 夢遊二十世紀 『繡像小説』1-4期 1903

奥付なし 元版 別表紙 孔夫子旧書網(図9、10)

第四編 補譯華生包探案 「華生包探案」『繡像小説』4-10期 1903

奥付なし(光緒二十九年癸卯仲冬序) 元版 別表紙 架蔵(図11、12)

注:光緒三十二年歲次丙午孟夏初版 / 光緒三十三年歲次丁未孟春二版 上海圖書館

第五編 小仙源 『繡像小説』3-16期 1913-推定1904年四月

奥付なし 元版 孔夫子旧書網(図13)

注:光緒三十一年十一月首版 / 光緒三十二年歲次丙午八月二版 タンポボ文様 [付二193]

第六編 案中案 ×

注:光緒三十年五月首版 / 光緒三十一年三月再版 タンポボ文様 [付三31]

第七編 環遊月球 ×

注:光緒三十年七月首版 / 光緒三十二年三月三版 タンポボ文様 [付二17]

第八編 英国詩人 / 吟邊燕語 ×

光緒三十年七月首版 / 光緒三十二年四月三版 元版 架蔵(別表紙あり? 図14、15、16)

光緒三十年七月首版 / 光緒三十一年三月再版 タンポボ文様、扉元版 孔夫子旧書網(図17、18、19)

注:金銀島で第一集第八編がある(後述)。光緒三十年九月首版 元版 別表紙 影印本架蔵。書影は[付125]より(図20、21、22)



3



6



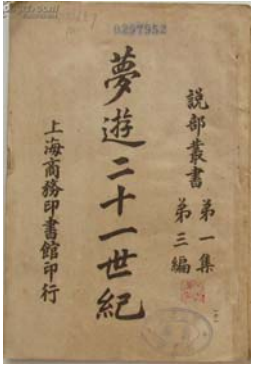
5



4



3b



10



9



8



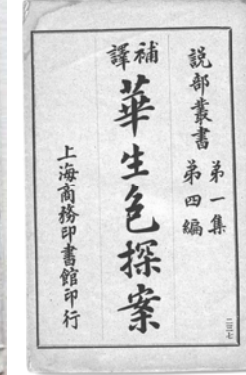
7



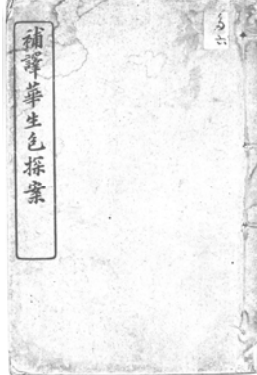
14



13



12



11



18



17



16



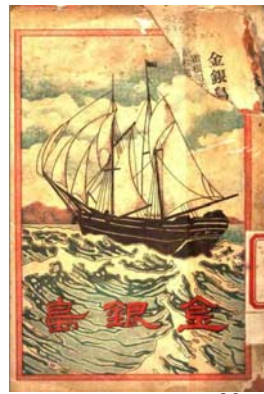
15



22



21



20



19



26



25



24



23



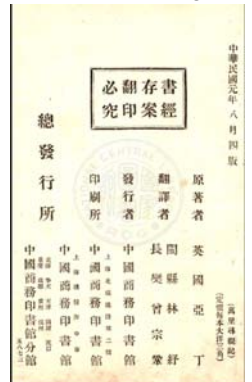
30



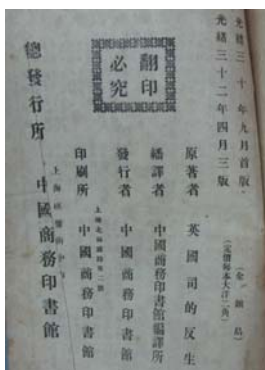
29



28



27



33



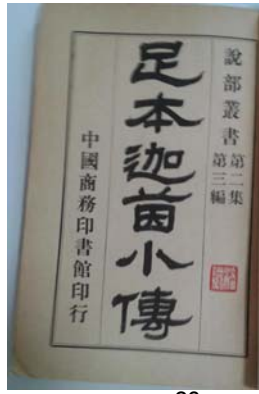
32



31



37



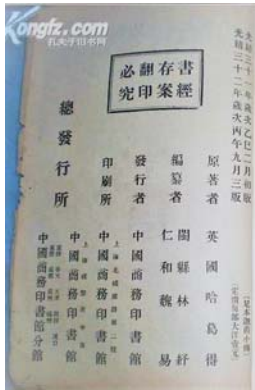
36



35



34



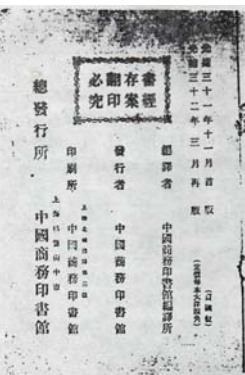
40



39



38



45



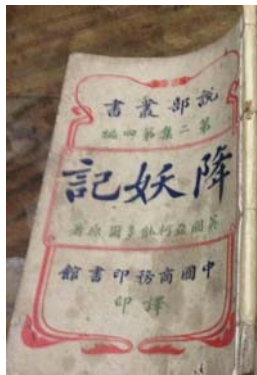
44



43



42



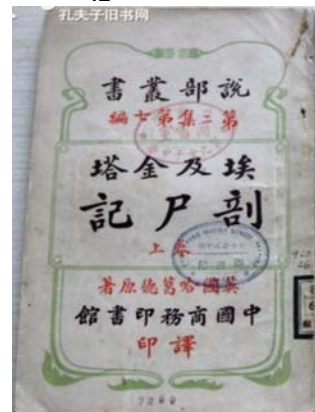
41



48



47



46



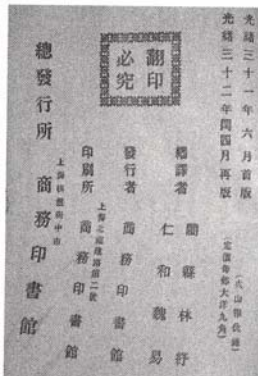
52



51



49



54



53

第九編 美洲童子 / 万里尋親記 ×

光緒三十年甲辰孟冬初版 / 光緒三十一年乙巳九月二版 タンポボ文様、扉元版 孔夫子旧書網 (図23、24、25)
 中華民國元年八月四版 タンポボ文様 台湾華文電子書庫 (図26、27)

注：二版1905年はタンポボ文様である。しかし、初版の1904年版がそうであるとは限らない。鄭方曉53頁^{*2}は別表紙

第十編 黄金血 ×

光緒三十年十一月首版 元版 別表紙 影印本架蔵 (図28、29、30)

第二集

第一編 金銀島 ×

第二集第一編 光緒三十年九月首版 / 光緒三十二年四月三版 タンポボ文様、扉元版 [付125] (図31、32、33)

第二編 回頭看 『繡像小説』25-36期 推定1905年正月-六月

光緒三十一年二月二十日 タンポボ文様 [付2282] (図34、35)

第三編 足本迦茵小伝 ×

光緒三十一年二月十三日 元版 孔夫子旧書網 (図36、37)

光緒三十一年歲次乙巳二月初版 / 光緒三十二年歲次丙午九月三版 タンポボ文様、扉元版 孔夫子旧書網 (図38、39、40) [付2150]

第四編 降妖記 ×

光緒三十一年歲次乙巳仲春初版 / 光緒三十三年歲次丁未季春三版 タンポボ文様 孔夫子旧書網 (図41、42)

第五編 珊瑚美人 『繡像小説』27-41期 推定1905年二月-八月

光緒三十一年四月首版 / 光緒三十一年九月再版 元版 実藤文庫 孔夫子旧書網 (図43)

光緒三十一年四月首版 / 光緒三十一年九月再版 タンポボ文様 [付日133]

第六編 賣国奴 『繡像小説』31-48期 推定1905年二月-十二月

- 光緒三十一年十一月首版 / 光緒三十二年三月再版 タンボボ文様 中村忠行複写旧蔵(図44、45)
- 第七編 埃及金塔剖尸記 ×
光緒三十一年三月首版 タンボボ文様、扉元版 孔夫子旧書網(図46、47、48)
注：第一集第一七編 / 第十七編 中華民國二年十二月再版 タンボボ文様(注：元版の延長上にある試行本だろう) 孔夫子旧書網
- 第八編 懺情記 ×
光緒三十二年歲次丙午十二月二版 上海図書館 写真なし
- 第九編 奪嫡奇冤 ×
光緒二十九年十月首版 / 光緒三十二年五月三版 タンボボ文様、扉元版 孔夫子旧書網(図49、50、51)
- 第十編 英孝子 / 火山報仇録 ×
光緒三十一年六月首版 / 光緒三十二年閏四月再版 タンボボ文様 [付345](図52、53)

上の一覧表を見てわかること。先元版は、第一編と第二編を除いては『繡像小説』掲載の作品が主となっている。ただし、現在判明しているのがそうだというだけだ。将来、別の資料が出てくる可能性までは否定できない。

奇妙な現象 集編番号の重複

興味深いのが『金銀島』だ。関連する書影をふたたび掲げる。



『金銀島』影印本(図21) 『吟辺燕語』(図15)

以前に指摘したとおり、第一集第八編『吟辺燕語』と同じ集編番号で『金銀島』(ステイヴンソン『宝島』の漢訳)がある。

私が見ているのは影印本だ。扉は元版であって別表紙(海上に浮かぶ帆船)がついている。表紙上方右肩に破れがある。扉にも同じ箇所が

破損しているのがわかる。

付建舟論文*3が言及しているものと同一だ。

付建舟は、この版本そのものについて疑問を提出した。それを紹介しながら説明する。

まず表紙についての疑問だ。扉には「説部叢書第一集第八編」とあるが表紙にはその表記がない。それは商務版「説部叢書」の慣例に符合しないという。

それについて付建舟は3条の解釈を提示する。要旨を引用して以下のとおり。

- 1、影印本の間違い。影印本を制作したとき別の表紙をまちがって取り付けた。
- 2、影印本が間違っていなければ、原物が間違っていた。
- 3、原物がまちがっていないならば、初版がそうだった。

別の表紙が間違っているというならば、1と2は同じ意味だ。残るは3のみ。

私は、原物どおりに影印本が作成されたと考える。上の3に該当する。

その理由。商務版「説部叢書」には、別表紙を貼り付けた例がいくつか存在する。別に掲げた書影を見てもらえればわかる。『経国美談』(図7)、『夢遊二十一世紀』(図9)、『補訳華生包探案』(図10)、『吟辺燕語』(図11)、『黄金血』

(図28)などがそうだ。鄭方曉53頁は、『美洲童子万里尋親記』の別表紙も掲げている。『金銀島』も例外ではない。

別表紙は最初から『金銀島』についていた。影印本で見ても実物のままと示している。そう判断する理由を説明しよう。

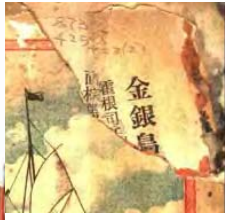
表紙と扉の右肩部分が同じように破損している。それは最初から別表紙がついていた証拠になる。また、本文の冒頭3文字が破れていて読むことができない。「哲姆者」とある。ところが、その3文字は表紙の破損箇所から顔のをぞかしている。「霍根司哲姆者」は物語の主人公少年ジム・ホーキンスの名前だ(図54、55、56)。



56



55



54

破損部分が、表紙、扉、本文の3ヵ所とも一致する。この事実は、最初から表紙がついていたことを示している。

問題は、集編番号だ。「第一集第八編」と明示している。この集編番号は『吟辺燕語』と同一である。奥付の表記が正しいとすれば、『吟辺燕語』は光緒三十年七月首版の刊行だ。一方の『金銀島』はそれよりも二ヵ月遅い光緒三十年九月首版となっている。後から刊行された書物が先行するものと集編番号を同じにする。奇妙だ。どう考えても誤記である。

誤記だと判定するのは、この刊行年月のことがひとつ。もうひとつは、「第二集第一編」を掲げたタンポポ文様の元版が存在していることだ。重要な資料だからもう一度引用する(図31、32、33)。



33



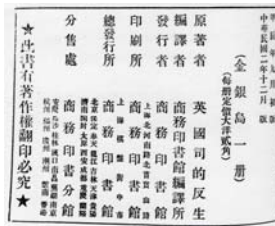
32



31

第二集第一編 光緒三十年九月首版 / 光緒三十二年四月三版 タンポポ文様、扉元版 [付125]

元版第二集第一編『金銀島』は、後年初集に編入された。その番号は自動的に変換されて第11編である(図57、58、59、60)。



58



57



60



59

不審な点はどこにもない。ならば、元版の「第一集第八編」は誤記だったと考えるよりしかたがないだろう。

上の『金銀島』は三版だ。タンポポ文様の再版本があるはず。その刊年は光緒三十一年だと推測している。いつか見てみたいものだ。

結 論

商務版「説部叢書」元版に第一集第八編という間違っただけの表示をする『金銀島』が実在している。また、同じ作品でタンポポ文様の第二集第一編がある。これらは、何を意味するのか。

それは、商務印書館編訳所の編集管理が杜撰であったことを示している。

もうひとつというならば、奥付に記載された刊年表記が統一性に欠けるように見える。たとえば『小仙源』初集第5編は刊年を「1905.11 / 1913.12四版 / 1914.4再版」(1905年版は新暦旧暦混用)と表示している。四版が出たあとに、なぜ再版なのか。読者は理解できずに混乱する。

商務印書館編訳所には、版次を決める規則があるはずだ。だが、それを説明した文章を読んだことがない。

今までの経験にもとづき上記の記載について私が推測してみる。道筋らしきものを少しは示すことができるかもしれない。

上記の1905年11月(新暦旧暦混用)は、該書の元版タンポポ文様初版だ。1913年12月四版は、読者からの評判がよかったことを示している。重版してタンポポ文様の四版になった。その時点で別に初集リボン文様の初版が刊行されている可能性がある。1914年4月再版は、四版よりも刊年は遅れているにもかかわらずなぜ再版というか。それは、1913年にリボン文様初版(上の奥付には記述なし)を出し、そこを起点にして1914年4月に再版したからだ。

以上は、推測にとどまる。現在はまだ資料が十分ではない。全部を合理的に関連付けて説明することはむづかしい。

それにしても、版数を統一することができなかったのは、外から見るとやはり奇妙だ。あるいは誰が見ても理解できる版次番号を記載することができなかった、と言い直しても同じだ。やはり編訳所の管理体制に問題があったからだろう。

つけくわえれば、試行本の存在も商務印書館内部の状況が混乱していたことを示す。タンポポ文様の元版からリボン文様の初集に再編された。リボン文様の版本は多数が刊行されている。ところが、意匠はタンポポ文様を継承したまま、使用する色彩を1種類に減じるものが別に存在する。集編番号は名称を「第一集」に統一して「第一編」から始めた。

編番号を「第十一」ではなく「第一一」とするのが新しい工夫かと思うだろう。ところが、これも統一されていない。『埃及金塔剖屍記』の試行本では「第一集第一七編」と「第一集第十七編」の2種類を使用している。「第一七編」ひとつになぜまとめなかったのか。これも混乱していることの証拠となる。明らかに編集管理上の問題である。

現在の巨大な商務印書館を見て過去の姿を類推することはできない。創業初期の商務印書館は、基本的に小規模な印刷会社だったのだ。印刷業から出版業へ営業分野を拡大する方向で模索していた。大規模発展の機会は日本金港堂との合併がもたらした。

「説部叢書」の刊行は、日本金港堂との合併が成立した後のことだ。すでにある翻訳小説を便宜的に収録して叢書の刊行が開始された。のち、金港堂との合併解消が実行される直前に初集へと切り替えた。合併解消が実現するとすぐさま初集全部を再版している。

商務版「説部叢書」が変化していった背後には、日本金港堂の存在があった事実を無視することはできない。

以上の経緯を見ると「説部叢書」の創設と刊行維持については、不安定要素が多いことがわかる。十分な準備と計画があったようには見えない。緻密に刊行を継続したと考えれば誤るだろう。元版の刊行開始から初集への模様替えまで、試行錯誤しながら規模を拡大していったのが実状だった。 罫

【注】

- 1) 阿英『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社
1954.8 / 増補版 上海・古典文学出版社1957.9新一
版、北京・中華書局1959.5。略号については樽目録
X 2の説明を参照のこと。以下、同じ。
- 2) 鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』復旦
大学2013 博士論文
- 3) 付建舟「晚清民国時期《金銀島》漢訳本考述」
『清末小説から』第125号 2017.4.1

『瑞西独立警史』について2
漢訳「スイス独立史」

沢本香子

- 張 梅 『晚清五四時期兒童讀物上の圖像叙
事』北京・中国社会科学出版社2016.12
曲阜師範大学青年學術文叢
- 王 鑫 『商務印書館与中国現代女性啓蒙』
北京・商務印書館2016.12
- (日) 瀬戸宏著、陳凌虹訳 『莎士比亞在中
国：中国人的莎士比亞接受史』広州・
広東人民出版社2017.1
- (美) 黄詩芸著、孫艶娜、張曄訳 『莎士比亞
的中国旅行：從晚清到21世紀』上海・
華東師範大学出版社2017.4

『新文学史料』2017年第1期(総第154期)

2017.2.22

- 百年前通俗作家筆下の張勳復辟..... 黄 誠
- 新中国成立前後阿英在津領導文藝工作始末
.....倪斯霆
- 新発現の葉聖陶早期文言小説《陳生》
.....魯 毅

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

盛時培序

つぎの序の文末には「癸卯四月雲間盛時培鉄
顔氏序於日本東京之柳町」とある。著者は1903
年に東京在住だとわかる。しかも上海雲間の人
だから漢訳者と同郷だ。

盛時培の認識は、我が国民を啓発するために
本スイス独立小史を出したという。それは司馬
遷が『史記』の「遊俠伝」を書いたのと同じ意
味だとする。

栄驥生、盛時培ともにほぼ同じ主旨である。
当時の中国がおかれた現状を変革したい。その
ためには国民への教育が必要だ。小説の効用を
認めて利用するという梁啓超流の認識をふたり
とも共有している。

盛時培も訳者を「陸君龍翔」とする。そこを
見れば奥付の「陸龍翔」の方が誤植なのかもし
れない。ちなみに、寅半生「小説閑評」は陸龍
翔訳としている。

楔 子

本文は16回だ。日本『元氣』が全20回だから
本文だけに限れば漢訳は数字的に4回分が少
なくなった。しかし、漢訳本文には前後に楔子と
結尾がつく。日本の底本にそれらはない。『警
史』のため特別につけ加えられた。全体で数え

れば合計して18回になる。

楔子には20歳前後で絶世の麗人韻蘭嬢が登場する。午後1時からドイツ語読本を教授した。学生は中国人だ。授業が終わると学生たちは自分たちで作った中国の詩を披露する。そのあと韻蘭嬢は、スイス開国独立の物語を彼らに話し聞かせることになった。すなわち、ドイツ語小説体の小冊子『スイス独立警世史(瑞西独立警史)』の梗概である。

この楔子は、若い女性韻蘭嬢が中国人留学生に向かってスイス独立史を物語るという作品全体の設定を明らかにする。この女性は外国人であるにもかかわらず、韻蘭とは中国人の名前のようだ。名前のつけようがあったらうに、不審なことである。

楔子と対になっている結尾については本稿の最後で触れる。

本文

底本と漢訳を順次比較対照しながら気のついたことを述べる。

日本『元氣』の本文冒頭と『警史』の該当部分を参考までに示す。くり返し記号は文字に置き換え、句点を適宜ほどこした。

元氣第1回 - 警史第1回

遙々たる那の白山は雪か銀か。しら雲の雲間に出るよひ月は緑り色なす湖水を照して研きすましたる鏡の如し。此方に連る山々は之に對て黛を画くにさも似たり。折から漁る舟の艫舵の音水に響きて岸邊を指して来りけるがその舟に乗りしは齡知命を越ると覺しき老夫と筋骨逞ましき一少年と互に言をとり舵の且つ語ひ且漕くその様日内瓦湖の底深き話とこそは知られたり。

1頁

遙遙一山。山嶺白如雪如銀。雪乎銀乎。岩間之雲氣乎。山上明月。下照湖水。澄澈

如鏡。衆峰繚繞。群樹周遮。一碧無盡。忽聞欸乃之声有。一漁舟。隱約自岸邊蕩漾而出。乘舟者一老夫。年越知命。与一強銳之少年互言笑。少年操舵盪舟。至湖深處。6頁

はるか遠くの山の嶺は白くまるで雪、まるで銀だ。雪か銀か岩間の霧か。山の明月は湖水を照らし透き通って鏡のようだ。峰々は広がりめぐり木々がまわりを遮り全体が青緑色だ。ふと舟をこぐ櫓の音が聞こえた。漁舟が一艘ぼんやりと岸邊から揺れながら出てきた。舟に乗るのは知命(五十)を超える年齢の老人で精悍な少年と談笑している。少年は舵を操り舟を漕いで湖の深いところまできた。

日本語原文にある「日内瓦湖」はルビを見れば英語でいうジュネーヴ湖だ。これはレマン湖である。漢訳では省略した。

両者を比較すれば、大きくは一致している。ただし、細かな部分が異なっていることがわかる。

「しら雲の雲間に出るよひ月」を「岩間之雲氣乎。山上明月[岩間の霧か。山の明月]」と分割して「雲間」を「岩間」に理解したように見える。漢訳はたぶん「雲間」の誤植だ。それとも漢訳者の郷里上海「雲間」と重なるのを嫌ったのかもしれない。

漁舟が向かう先が原作と漢訳では反対だ。原作は「岸邊を指して」だが漢訳は「岸邊から揺れながら出てきた[自岸邊蕩漾而出]」とする。

それらは原文から少し離れる。だが、小さな違いである。全体の雰囲気は漢訳はよく移植しているといえることができる。

舟の老人が少年にスイスの歴史を語る。そこに出てくる人名が複雑だと漢訳者の判断があったとしても不思議ではない(引用文はルビ省略。波線は筆者)。

是に繼て王位空虚となり綱紀紊乱せしかばカスケール王アルフロンソとボヘミア王オットカーと互に王位に即かんと争しが撰挙侯皆之を拒み遂に瑞西国のハブスブルグ公羅徳布を立て、日耳曼帝と為したりける。
3-4頁

繼是数世。王位空虚。綱紀紊乱。群雄角逐。争求王位。既而立我瑞西国之火沙路公羅徳布為日耳曼帝。7-8頁

これに繼いで幾世かは王位空虚となり綱紀紊乱したため群雄は争い王位を求め、ついに我がスイス国のハブスブルグ公ルドルフを立ててドイツ帝とした。

読者にとっては羅徳ブルドルフだけが重要だと漢訳者は考えたようだ。日本語波線部分の固有名詞などは省略して漢訳のように「群雄角逐。争求王位」でまとめた。

ルドルフの息子がアルブレヒトだ。日本『元氣』の漢文「瑞西独立小史」では「亜爾伯勤」と漢字を当てた。ところが、本文ではなぜだか「^{アルバルト}亜爾的勤」と「的」に変化している。「伯」の方が原音に近いのだが、変更した理由は不明。漢訳は底本通りに「亜爾的勤」とする。舟上の少年が歌う部分(9頁)は日本語底本にはない。漢訳者がつけ加えた創作である。

そういう箇所を除けば、ほぼ逐語訳といってもいいだろう。

スイス史の概略を説明した以上が、物語の導入部分になっている。

元氣第2回 - 警史第2回

第2回は悪代官とその家来の極悪非道ぶりから物語がはじまる。

シラーによるもとの話はこうだ。

ウンターヴァルデン州メルヒタールに住む農夫父子が被害者である。悪代官ランデンベルクの家来が農夫の牛2頭を奪おうとしたため息子のアルノルトはそれに抗い家来の指を打ち折っ

て逃走した。父はとらえられ熱い鉄棒を両眼に突き刺され失明する。

これが日本『元氣』では次のようになる。

却説翁徳丁の人民に^{ヘンリー・ホンメルヒタル}顛理渾麥爾希達と云ふものありしが些細の過失あるとて罰せられ二頭の牛を没収されけるが或日^{ランデンベルク}郎田山の僕牛に犁を繫き犁夫が麵包を食するとき麥爾希達より奪ひ取りし牛を以て之に増し加へたり。麥爾希達の子に亜爾那脱と云へるものありしが今此体を見て憤怒に堪へず矢庭に馳寄て鋤を奮ひ其僕を撃ち二指を切落としたり。6-7頁

ルビなし「翁徳丁」はウンターヴァルデンのこと。「瓦」が抜けている。34頁では^{ランデルフルデン}「翁徳瓦丁」とある。「顛理渾麥爾希達」はメルヒタールに住むヘンリーという意味だが、これでは姓名のように見える。ここでは具体的にプラウを使う農夫を出して奪った牛2頭を加えている。牛を奪われた父の息子がルビなしの「亜爾那脱」すなわちアルノルト(別の箇所ではアルノルド)である。日本語の「麵包を食するとき」前後の話がつながりにくい。だからからかこを翻訳して『警史』は奇妙なことになる。

有翁徳丁人。名顛理渾 麥爾希達者。偶犯小過。而当罰牛二頭入官。麥爾希達貧無牛。過郎田山之田伴。其僕方繫牛於犁而歸食曰。是皆罰於人而來者也。遂纂^マ[纂]取之。以獻於官。既而其僕怪之。責牛於^マ麥爾希達之子亜爾那脱。怒而鬪。亜爾那脱奮鋤擊其僕。断二指。10頁

ウンターヴァルデンの人、名前をヘンリー・ホンメルヒタルという者がいた。たまたま小さな過ちを犯し罰せられて牛2頭をお上に納めろということになった。メルヒタールは貧しく牛など持ってはない。ランデンベルクの畑のそばを通りすぎるとその

下僕がちょうど牛にブラウを繋ぎ食事に帰るところだ。これらは罰金として来た牛だ、という。そこでその牛を奪いお上に献じた。すると下僕がそれをとがめてメルヒタールの子アルノルトにその牛を要求した。怒って争いになり、アルノルトは鋤を振り上げその下僕を殴りつけ指2本を切り落とした。

翁徳丁は、たぶん誤植だろう。別のところで翁徳瓦丁と表示するのが正しい。だが、底本がそうになっているから漢訳はならっただけ。

メルヒタール(としておく)とその息子アルノルトは日本『元氣』に出てくるそのままを漢訳している。登場人物は同じだが細部が異なる。『警史』ではそのメルヒタールが悪代官ランデンベルクの下僕から牛を盗むことに解釈してしまった。そうなると悪いのはメルヒタールになってしまう。小さな誤解が物語全体の調和を崩した。ここは悪代官ランデンベルクの極悪非道を具体的に記述する箇所なのだ。それが『警史』ではそうならないから奇妙な理解だという。漢訳者はもとのウィリアム・テル伝説を知らないと見える。頼ったのは日本『元氣』のみらしく部分的に解釈を間違えたために本来の話の運びから少しずれてしまった。

逃走したアルノルトは悪代官ランデンベルクの追っ手に追跡されることになった。アルノルトはアルプス山脈中に逃れる。食糧も尽きて疲労もたまったところに木こり小屋を見つけた。出てきたのは「年頃十六七とも覚しき少女」(8頁)だ。『警史』ではそれが「ひとりの少女が出てきたが年はおよそ15、6である[一少女出。年約十五六]」(11頁)と若くなった。少女の名前は梨姿リシーであることが後の第10回で明かされる。ここらあたりは、もともとから日本『元氣』の創作部分だ。

その主人は50歳前後の男だ。アルノルトに一応のもてなしをほどこしたあと寝るようにと出ていった。夜中に少女がひとりでアルノルト

のもとにやってきた。なにか子細があるらしいと警戒する。

垂爾那脱^{いぶかし}不審み未だ打解けもせざる少女が更深けて吾が寢所へ忍び来るこそいと怪し必ず子細ぞあるべし。若しや那の男少女を以て情事に託し我を欺く手段にはあらざる歎。左すれば彼は山賊などの類ひならん。果して然らんには少女と雖も用捨せじと思按し短剣を控へて起き直れば…… 11頁

アルノルトが警戒するのは当然だ。『警史』はこの部分を削除して翻訳していない。性的な表現があることを嫌ったのだろう。

少女が告げていうには、主人はゴロツキ^{オビル}拿比留をよびよせ、悪代官ランデンベルクのもとにあなたを送ろうとしている。早く逃げて。アルノルトは娘に実の父かと質問する。この家の主人は山賊^{ゴルネイド}戈擲奴であり、彼女は誘拐されてきたと答える。しかも悪代官ゲスラーに見せめられもうすぐ連れていかれる(14頁)。

日本『元氣』は、主人とゴロツキは分けて書いている。ところが、『警史』は主人のことをゴロツキで名前は拿比留だと誤解した(13頁)。しかも、次頁ではこの家の主人を山賊戈擲奴(14頁)だと書いて前後が矛盾する。

アルノルトは少女をほっておけずふたり一緒にその家から脱出する。事情を察した山賊^{ゴルネイド}ゴルネイドは待ち伏せていた。乱闘が始まる。少女は山賊^{ゴルネイド}ゴルネイドに蹴られて谷底に落ちる。そこに法牟^{ホウムガルテン}牙丁が助けに駆けつける。山賊^{ゴルネイド}ゴルネイドは逃亡した。説明のない^{ホウムガルテン}ホウムガルテンについては、後編37頁で明らかにされる。

少女を巻き込んだこの乱闘場面には、日本『元氣』特有の躍動感がある。『警史』は一部人名の勘違いが生じているが、その場面そのものは逐語訳している。

おもしろいのはアルノルトの奇策だ。ホウムガルテンに捕縛される風を装い追っ手を油断さ

せる。時機をうかがい突然反撃にでる。敵を切り倒してその場を逃れた。一場の活劇を日本語のほぼそのままに漢訳している。

元氣第3回 - 警史第3回

『警史』では、底本にある風景描写を少し後方に移動させ、まず壮士^{ウイルニー}威兒尼が登場する。兎を追っている。その同じ兎を射抜いたのが「^{ワルトル}瓦爾徳が^{ウキルレムテル}継子維廉惕爾」だ。国家のために党をただちに結ぶことはせず、時機を待つことにして分かれた。

ここからしばらくテルの姿は見えなくなる。

元氣第4回 - 警史第4回

アルノルトは逃れてワルトルの家に身を寄せていた。そこに壮士^{ウイルニー}ウイルニーが訪ねてくる。自分の屋敷が悪代官ゲスラーに目をつけられ奪われそうだと訴える。彼が伝えてアルノルトの父親が鋭刃で両眼を抉られたという。アルノルトはそれを聞いて憤慨する。3人が評議をしているところにハウムガルテンが参加する。スイス3州(瑞西シュヴィーツ、烏梨ウーリ、翁徳瓦丁ウンターヴァルデン)の志士を湖水の近くにある^{ルートリー}魯多利に集合させるため活動することにした。

このルートリーは、シラー戯曲第2幕に出てくるリュトリだ。3地方の代表が集まって同盟の誓いをたてるのでリュトリの誓いという。歴史でいえば1291年に結ばれた誓約同盟である。ここにはウィリアム・テルの姿が見えない。テルは、スイス独立運動には距離を置いているという意味だ。注目しておく。

元氣第5回 - 警史第5回

当時は衆人に向かって演説することを禁じられていた。ワルトルは、ある奇策を用いてそれを破る。深山にいる獐猛な野獣を捕獲し見世物にすると宣伝し人々を集めたのだ。我々国民の膏血を吸い苦しめる見えない怪物だと説く。聴

衆はそれが^{アドルフ}亜多弗だと口々にいい撃ち殺せと叫んだ(39頁)。

『警史』30頁ではワルトルについて同じページで漢字が異なる。瓦爾得と瓦爾徳のふたつで示す。同音による混同だ。誤植といってもいい。この作品に限らず、得と徳は中国では普通に取り違える。

日本『元氣』の漢文「瑞西独立小史」では^{アルプレヒト}爾伯勤(アルプレヒト)だと表記していた。ここでなぜ^{アドルフ}亜多弗になるのか理由不明。一方の『警史』は、その人名を出さない(33頁)。底本内部で異なっていることに気づいた可能性がある。

聴衆の中にまぎれていた探偵吏(漢訳は密探)がワルトルを捕まえようとする。彼は聴衆にまぎれて逃げる。川べりにあって月が雲間に隠れたのに乗じて大石を川中に投じた。追っ手はその水音にだまされた。

ワルトルの弁舌が優れていることは千軍万馬よりも有力だ。だから圧制政府が言論の自由を奪う。こう書くのが日本『元氣』だ。漢訳はそれを次のように書きかえる。

以三寸舌。発揚大義。抗政府之威稜。激人民之壮気。厥後竟成其志。傾除惡暴之政府。而開闢^{瑞西}獨立自治之基。35頁

三寸の舌で大義を発揚し、政府の威力に抗い、人民の壮大な氣力を引き起こす。その後にようやくその志を成立させるのだ。凶暴な政府を倒してスイス獨立自治の基礎を開くのである。

小説の主題(スイス獨立自治)を前面に押し出し解説した。

元氣第6回 - 警史第6回(大幅削除あり)

ここから壮士^{ウイルニー}ウイルニーとアルノルトに話が二分する。

アルノルトは悪代官ランデンベルクを狙いか

つ情報収集のために乞食に扮装し撒爾年(サルネン)城(別名ハウスブルク城)、羅斯(ロスベルグ、別の箇所ではロベルク)城に忍び込んだ。ここでいう「城」は、城塞という意味だ。漢訳も「城」にしている。そこで谷底に落ちたあの少女(梨姿リシー)と再会した。

日本『元氣』では、もうひとりの壮士ウイルニーに物語が切り替わる(44頁)。『警史』は改行もなく、別の話になっていることがわかりにくい(37頁)。

壮士ウイルニーは、ウーリへ赴く途中で道に迷った。雪に降りこめられ身動きがとれない。そこへ大型犬が駆けつけ救助された。ここではない「セントベルナルド」にある修道院で訓練した救助犬の説明がある(46頁)。Saint-Bernardを英語読みして「セント・パーナード」のこと。『警史』ではこの部分を省略する(37頁)。

犬に導かれて人家にたどりついた。40歳ばかりの女性が布を織り、かたわらで少女が裁縫をしている。

少女について次のように描写する(ルビ省略)。

「少女は身に縋縋を纏ひて粉装せざれとも天成の美人にて錦繡を着け脂粉を凝らせしより遙かに勝りて奥床しく昔をしのぶ面影は由緒あるもの、零落て葎の宿に世を避け、んと思はれたり」(47頁)

それを漢訳して「裙襖素風致天然[衣服は飾り気がなく容姿は優美で自然だ]」(38頁)だ。かなり省略したといえる。

母親は壮士ウイルニーにむかって、救助犬が誕生するきっかけとなったライオン変身譚を語る。その内容はすでに触れたのでここでは述べない。物語のなかで別の話を物語る入れ子状態だ。「アラビアン・ナイト」を連想させる。ここは日本語で約6頁にわたっている。『警史』はこの部分をバツサリ削った。50歳ばかりの主人が家にもどってきたところに話を続けたのだ。

漢訳者にとっては、救助犬のはじまりを説明するのにライオン変身譚を持ち出すのは全体からすれば余計なことだという判断があったのだろう。小説をスイス独立史で貫徹するためには不必要かもしれない。だが、このライオン変身譚はこの物語に不思議で幻想的雰囲気をもたらしている。そういう小説なのだから『警史』で削除したのは惜しかった。

主人は昔留撒爾に住んでいた列仁克という。悪代官ゲスラーに全財産を奪われてこの山中に住んでいる。民衆を扇動する演説をしたワルトルが^{ハフスボルグ}ハフスボルグの獄に送られると聞かされた壮士ウイルニーは、^{レジンク}レジンクとともに救うために出かけた。物語の展開につれて登場人物が増えていく。

元氣第7回 - 警史第7回

壮士ウイルニーとレジンクは、ワルトルを救い出すためにつながれているであろうある屋敷に忍び込んだ。そこで、これも同じ目的で来ていたアルノルトと出会う。ここで分かれていたふたりは合流した。

ワルトルと思われた男は偽者で、3人は偽情報によっておびき出されたのだった。悪代官ゲスラーの兵士が大勢で襲ってきた。激闘がはじまる。3人の奮闘ぶりを「三人は項王樊噲が勇を奮ひ大勢が中へ懸け入り十字に懸け破り巴字形に追ひ廻はして敵を悩ましけれど」(66-67頁)と中国の例を挿入した。ところが、『警史』はそれを無視している。なぜか翻訳していない。

3人ともに捕縛されそうになったとき、どこからともなく矢が射こまれてきて敵は退却していった。その際、レジンクが拉致される。壮士ウイルニーとアルノルトのふたりは、レジンクを救う救わないで議論をはじめた。とりあえずレジンクの妻子に告げて避難させる必要がある。壮士ウイルニーが知らせに向かった。

どこから射られた矢なのか。『警史』は疑問

を書いている(47頁)。そうすれば話が後に続く。伏線のひとつだ。だが、日本『元氣』にはその語句はない。矢といえばテルに決まっている。そう考えれば、わざわざ疑問を提出する必要はない。ただ、漢訳が施した少しの加筆は、中国人読者にとっては底本よりも用意周到であるということができる。

日本『元氣』には多くの人物が登場してきて活動する。また場所が移動する。動きのある描写が続く。人名を含めてこれらをすべて谷口が創造したのだろうか。どこかに別の底本があるのではなからうか。そういう疑問がやはり出てくる。 罍

清末小説から

野間信幸氏より資料をいただきました。感謝します

- 藤井得弘 【書評】ホームズを生み出したかった中国人 樽本照雄編・訳『上海のシャーロック・ホームズ』北海道大学文学部中国文化論研究室『火輪』第27号 2016.11.30
- 蘇 精 《依溼雜説》の虚与実 『新聞出版博物館』2016年第2期(総第29期) 2016.12
- 劉勇、張悦 従《1872-1949文学期刊信息総匯》看劉增人的史料科学研究 『中国現代文学研究叢刊』2016年第12期(総第209期) 2016.12.15
- 季 進 “抒情伝統”視域下的《中国現代小説史》 『中国現代文学研究叢刊』2016年第12期(総第209期) 2016.12.15
- 胡 閩蘇 救亡的“寓言”:晚清小説中的波蘭亡国書写 『中国現代文学研究叢刊』2017年第2期(総第211期) 2017.2.15
- 松村茂樹 吳昌碩と長尾雨山の上海愛而近路の旧居について 『大妻女子大学紀要

(文系)』第49号 2017.3

- 孟 慶澍 彼此在場的讀与写:1907年的周氏兄弟 『中国現代文学研究叢刊』2017年第3期(総第212期) 2017.3.15
- 鄭 国和 『柴四朗《佳人奇遇》研究』武漢大学出版社2000.12
- 单 德興 『翻譯与脈絡(修訂版)』北京・清華大学出版社2007.12 / 2016.5 翻譯与跨科学術研究叢書
- 孫 艷娜 『莎士比亞在中国 SHAKESPEARE IN CHINA』英文 開封・河南大学出版社2010.9 英語博士文庫
- 李 曉萍 『晚清《女子世界》(1904-1907)中婦女知識与典範之建構』東海大学中国文学系研究所2012.6 博士論文 電字版
- 趙俊邁著、汪班 BEN WANG、袁曉寧 YUAN XIAONING 英訳 『典瑞流芳:民国大出版家夏瑞芳(中英对照)』台湾商務印書館2014.6
- 馬 睿 『文学理論的興起:晚清民初的一份知識档案』濟南・山東文藝出版社2015.6 李怡、張中良主編『民国歷史文化与中国現代文学研究』叢書
- 黄 湘金 『史事与伝奇:清末民初小説内外的女学生』北京大学出版社2016.3 文学史研究叢書
- 郭延礼、郭蓁 『中国女性文学研究(1900-1919)』濟南・山東教育出版社2016.7
- 馬軍編撰 『中国近現代史訳名对照表』上海世紀出版股份公司上海書店出版社2016.10
- 馬 勤勤 『隱蔽的风景:清末民初女性小説創作研究』天津・南開大学出版社2016.10 “性別視角下的中国文学与文化”叢書
- [荷蘭]賀麦曉(MICHEL HOCKS)著、陳太勝訳 『文体問題 現代中国的文学社団和文学雜誌(1911-1937)』北京大学出版社2016.11 文学史研究叢書